第14章

教育学部附属学校園

1　附属学校園の理念及び統合移転の経緯

（1）附属学校園の理念、目標 ……1084
（2）統合移転の経緯 ……1085
（3）残された課題 ……1090

2　附属小学校

（1）沿革 ……1091
（2）教育研究の変遷 ……1097
（3）教育実習 ……1100
（4）学校行事・学校生活 ……1101

3　附属中学校

（1）沿革 ……1105
（2）教育研究 ……1109
（3）教育実習 ……1110
（4）学校行事・学校生活 ……1112
（5）部活動、その他の活動 ……1115

4　附属高等学校

（1）沿革 ……1116
（2）教育研究 ……1118
（3）教育実習 ……1122
（4）幅広い教育・体験に基づく教育 ……1123
（5）学校行事と学校生活 ……1125

5　附属養護学校

（1）沿革 ……1127
（2）教育研究 ……1131
（3）教育実習 ……1132
（4）学校生活・学校行事 ……1134
（5）その他 ……1137

6　附属幼稚園

（1）沿革 ……1138
（2）教育研究 ……1143
（3）教育実習 ……1145
（4）幼児の生活と行事 ……1145

附　録……1149

1　附属学校園の理念及び統合移転の経緯

（1）附属学校園の理念、目標

教育学部附属学校園は、小学校、中学校、高等学校、養護学校、幼稚園の５校園から成っている。これら附属学校園は「教育基本法」及び「学校教育法」の定めるところにより、幼児・児童・生徒に対し、それぞれの教育を施すとともに、教育学部附属学校規程第２条により、次のような実験・実習校としての機能が定められている。

第２条　学部の教育計画の実施に協力し、次の機能を果たす。
(1)教育の理論及び実際に関する研究並びにその実証を行う。
(2)学生の教育実習を行う。

まず、第１の教育研究及び実証については、公教育の改善・充実の一環として期待されている学校教育の実証的な研究の推進、並びに研究成果の提供といった役割が挙げられる。このほか、今後の学校の在り方や教育制度についての研究を行い、これらの研究を公開して地域に開かれた学校として先導的、開発的な研究実践を図っている。

第２の教育実習については、学部教官と附属学校園教官とが緊密な連携を図り、教育に関する優れた後継者の育成に当たっている。このため、実習生に対して実際の学校教育の全分野について一連の課程を実際に体験させるとともに、基礎的な理解と技能の習得を目指している。

さらに、様々な面で変化する社会に対応できる教育の在り方を、教育学部及び同附属教育実践研究指導センターとともに模索し、教育内容及び方法に関する諸問題の系統的・総合的研究を行うため、幼稚園から高等学校までが研究機能において一体化する必要がある。これは一つの学校種で終わりがちな教育・実践・研究を、五つの学校園が縦断的・有機的に機能し、一学校種を超えた総合的な研究成果を期待するからである。そのために、幼児・児童・生徒の発達段階に応じた最も適した教育内容・方法を先導的・系統的に研究し、実践するために附属学校園研究部を組織している。

附属学校園では、これらの考え方の上に立って、以下のような教育目標を掲げ、教育学部教官とともに教育の研究及び実践に取り組んでいる。

○附属学校園の教育目標

21世紀に対応する人間像は、「豊かな人間性を持っている人格」と考える。そこで、附属

学校園では次の七つの教育目標を掲げている。

目標１「豊かな人間性を備えた人格の育成」

第一段階　豊かな人間性を育む基礎を作る

第二段階　豊かな人間性を醸成する

第三段階　豊かな人間性を自ら進んで体得するよう導く

第四段階　豊かな人間性の完成に向かって自己開発を促す

目標２「生涯学習の基礎を作る」　－自ら学ぶために－

目標３「健全な身体を育成する」　－地域の特性に応じた方法で－

目標４「文化的活動を促進する」　－情緒性の育成を目指して－

目標５「徳性の涵養を目指す」　－特別活動を通して－

目標６「国際化社会、情報化社会に適応する基礎を作る」

目標７「安全性を確保する」

（２）統合移転の経緯

計画に至る状況

附属学校園は当初、広坂地区に小学校、中学校、幼稚園、平和町地区に高等学校、東兼六地区に養護学校が所在し、３地区に分かれていた。

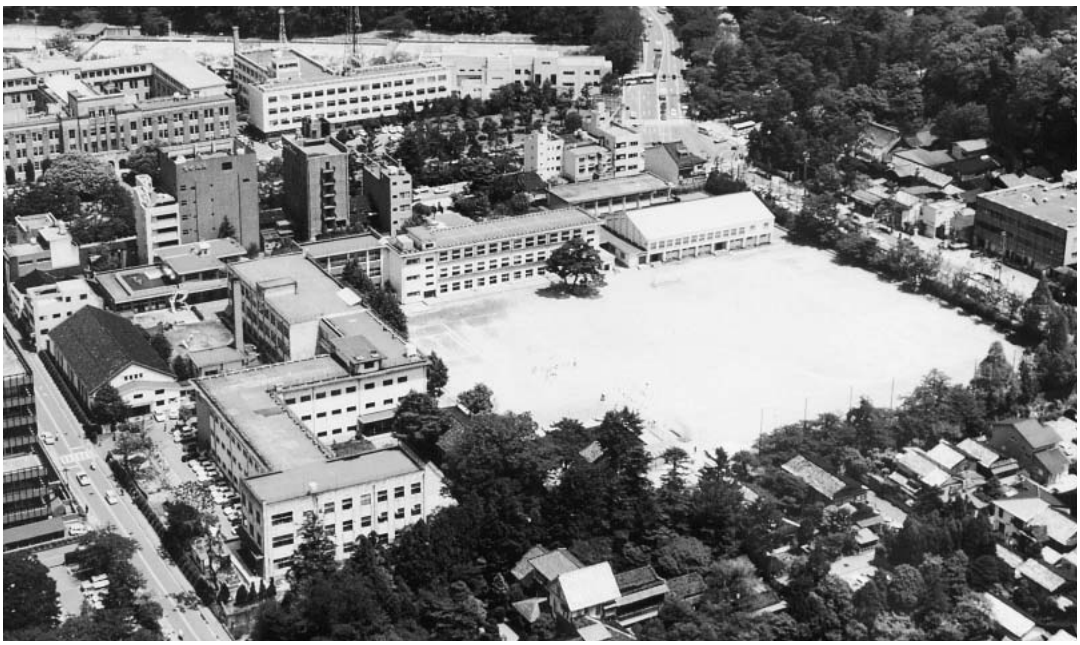


写真１４－１　旧広坂校舎（北陸中日新聞社　提供）

広坂地区は金沢市の中心部、広坂通りを挟んで石川県庁舎と向かい合った所に位置して

いた。通学の便は良いが、周囲は行政・商業・観光施設が多く、学習環境としては適しているとは言い難い。また３校園の校地面積も、26,777m²と非常に狭いため、十分な教育活動が行える状況ではなかった。校舎は1952（昭和27）年から1961年に整備されているが、一部木造校舎の部分もあって老朽化が甚だしく、教育・研究に支障を来している状況であった。

平和町地区は金沢大学の総合運動施設に隣接しており、周辺は住宅団地や陸上自衛隊金沢駐屯地があるものの、寺町台の住宅・文教地区の一角にあり、裏手の野田山周辺には自然も十分残されている地域である。

東兼六地区は兼六園の東側に位置し、住宅密集地の中にあって周辺道路が非常に狭いが静かな環境にあり、商店街や文化施設にも恵まれている。校地に隣接して金沢大学のプールとテニスコートが設置されていた。

長期将来計画の発端（附属学校長期計画の策定）

附属学校園の施設充実を目指した長期計画が最初に作られたのは、1975年５月である。これは教育実習生の増加、教育方法の多様化・現代化に対応するためには、学級及び教官増、施設・設備の拡充を図ることが不可欠であるという観点から作成されたものである。

この長期計画の主なものは次のとおりである。

○小学校体育館の老朽化に伴い、旧幼稚園舎を取り壊した跡地に体育館を新築する。

○幼稚園を適切な集団規模にするため３～５歳児の６学級にし、園舎を増築する。

○高等学校に電算機室、教生控室を増設するとともに、各学年２学級増設し５学級体制とするために校舎を増築し、第２体育館を新営する。

○養護学校内に生活訓練棟を兼ねた宿泊施設を設置するとともに、重度障害児の就学義務化に伴って重度障害児学級を設置する。

これらの計画は一部実現したものもあるが、それぞれの計画に問題性を含んでいたり、財源が確保されないまま年月が経過していった。そして、1979年、金沢大学将来構想が策定され、角間地区への総合移転が明確になるとともに、平和町地区の総合運動施設や東兼六地区のテニスコートなども将来的には角間地区へ移される見通しとなり、これらが附属学校園の将来計画に大きく影響することとなった。

附属学校将来計画構想の策定

1982年度より金沢大学総合移転計画が実行に移されることになり、近い将来に平和町地区と東兼六地区の運動施設も角間への移設が確実視されることとなった。これら附属学校園に大きなかかわりを持つ敷地条件の変化を契機に、各学校園において改めて将来計画の検討を行うことが急務となった。附属学校広坂地区将来計画検討委員会は同年４月、かねてからの広坂地区での将来計画は敷地面積や建築規制上、実現は極めて困難と判断した。そこで３校園は平和町地区への移転を希望し、その必要面積は60,000m²との結論を出し

た。

これを受けて、附属学校将来計画検討委員会を設置し、同年10月に「附属学校将来計画構想」を策定した。これは四つの章から成っており、その中の第２章「基本構想」には幼・小・中・高の一貫教育体制を整備することが盛り込まれている。そのために幼稚園と高等学校の学級増を行うとともに、中高一貫教育体制を確立して教育課程の先導的研究をすることは、今や社会の要請であるとも述べている。また、将来計画と敷地条件では、平和町地区の総合運動施設跡地に附属中学校、広坂地区には幼稚園と小学校、東兼六地区の運動施設跡は養護学校の増築と運動場の拡張に充てるとしている。1984年４月、教育学部附属学校協議会で附属学校将来計画実現への方針が承認され、当面中学校の平和町移転を目指すこととなった。同年５月17日教育学部教授会で承認され、用地確保の要望書を教育学部長名で学長に提出した。

ところが、附属学校将来計画検討委員会が示した中高一貫教育体制の確立については、中学校と高等学校の間で議論を呼ぶこととなった。10回近くの協議を重ねたが、中高一貫教育の定義や高等学校への進学問題で意見の一致を見ることができなかった。その結果、中学校の移転は当分の間凍結することとなり、その旨、翌年４月の附属学校将来計画検討委員会に報告された。

統合移転に向けて

1986年９月になり、教育学部長より各校園長へ、凍結されていた将来計画について話し合いを再開するようにとの指示があった。これは1988年度の概算要求を見越してのことであるが、校舎の老朽化とともに運動場が小・中共用で十分な広さとは言えず、施設や児童・生徒の管理上の危険性が指摘されたこともその要因として挙げられる。

翌年３月の附属学校将来計画検討委員会に対し、学部長より将来計画を検討していく上での次のような四つの前提条件が示された。

①金沢大学の総合移転とは別個のものとして検討を行うこと。

②広坂地区はすべて移転する方向で検討すること。

③移転先の候補地としては平和町地区があげられること。

④中学校と高等学校間の接続の問題についてはこの将来計画とは別の問題であること。

以上のように、幼・小も含めた平和町への統合移転の方向が改めて示された。

これらの前提条件の提示を受けて、1987年６月に附属学校将来計画検討委員会は、将来計画構想委員会と移転問題実務委員会を設置し、統合移転のための本格的な審議に入った。そして、同年10月12日には附属学校将来計画書を策定し、幼・小・中が平和町への移転の意思表示を行うとともに、高校用地を含め84,000m^{2}の用地確保を目安とする方針を立てた。これは10月15日の教育学部教授会で承認され、翌1988年６月24日金沢大学評議会で承認、７月29日文部省国立学校の統合整備に関する連絡協議会（八の日会）で、計画概要「金沢大学教育学部附属学校の移転整備に係る検討事項」を説明する運びとなった。

これと並行して1987年12月以降、附属学校将来計画検討委員会は金沢大学事務局より統合移転計画基本構想策定の要請を受け、策定作業に入った。

統合移転整備事業の実施

附属学校将来計画検討委員会は、1990（平成２）年１月、いわゆる基本構想等の「３部作」と呼ばれる構想案を策定した。これは附属学校園の基本理念を示した『一貫した教育方法の研究推進のための教育環境整備と統合移転基本構想』、平和町地区の幼・小・中・高の具体的な共用施設案を示した『附属学校園統合移転計画におけるキャンパス構想』、及び『参考資料』から構成されている。これを機に移転が具体的な形として現れ、同年３月、石川県土地開発公社により野田町に隣接している民有地約9,000m²が先行取得された。

順調に動き始めたように見えた統合移転計画だったが、同年７月19日に開かれた校園長・副校園長会の席上、特別に出席を求めた藤教育学部長より、高等学校の新営は現時点では困難であり、必要に応じて改修・整備の努力をすることになるという大学側の意向が伝えられた。その理由として校舎の耐久度、耐用年数がまだ限界ではないこと、財政事情の悪化などが挙げられた。４校園の教育環境を整備し、附属学校園の基本理念を統合案の下に実現しようという方針は大きくつまずく形となった。特に、４校園が建物面積を出し合って建設を望んだシンボル的な存在の講堂や合宿設備、中高が共同で使用する特別教室など、多くの先進的、象徴的な計画の実現が困難になった。

しかし、高等学校の新営が不透明なままではあるが、大学事務局は同年11月、財団法人

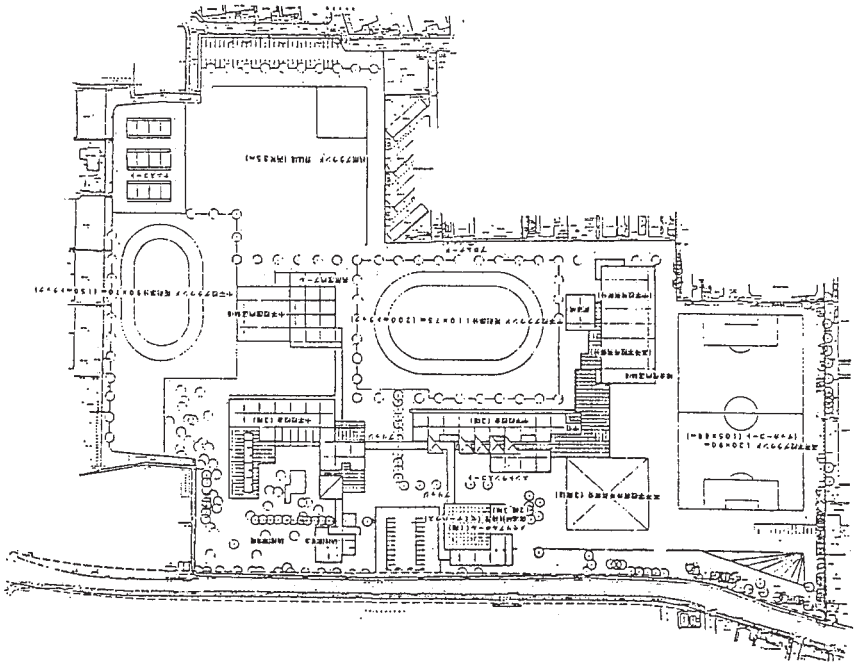


図１４－１　「RIEF」案マスタープラン

文教施設協会（RIEF）に「附属学校移転整備構想に関する調査研究」を委嘱した。同協会は翌年６月、通称「RIEF案」と呼ばれる調査研究報告書を提示した。これは、文教施設の専門家が先の「３部作」の基本理念を踏まえ、校舎配置、教室配置などを示したもので、基本構想から基本計画にまで及ぶものと言えよう。その後、建設予定地の用水や水道管の移設工事が進む中で、1992年９月に大学事務局施設部より附属学校計画建物面積表が提示された。附属学校将来計画検討委員会は、統合移転の理念に沿ったものとはほど遠く、「RIEF案」をも十分に踏まえているものとは言えないと反論したが、高等学校の同時改築が望めない状況では大枠を変更することは困難であった。以降「RIEF案」を基に統合移転整備計画の再検討を行い、翌年12月には文部省の了承を得るに至った。

1994年４月、中学校棟の建設着工にこぎつけ、４月25日には附属学校統合移転整備事業建設起工式を挙行した。その後、同年10月、幼稚園棟及び小学校棟も着工した。翌1995年３月には中学校棟と幼稚園棟が完成、７月には小学校棟も完成し、夏季休業中に移転作業が行われ、２学期開始の９月から平和町の新校園舎での教育活動が始まった。完成式典は同年12月９日に大学関係者をはじめ、教育委員会、地権者、地域関係者、建設工事関係者など約400名を招いて中学校体育館で行われた。

一方、養護学校においては、1996年に大学のテニスコート、プール跡地を取得して校地の拡張が実現し、運動場が拡張された。また、念願の日常生活訓練施設「すずかけの家」が新設され、同年11月９日、完成式典が行われた。

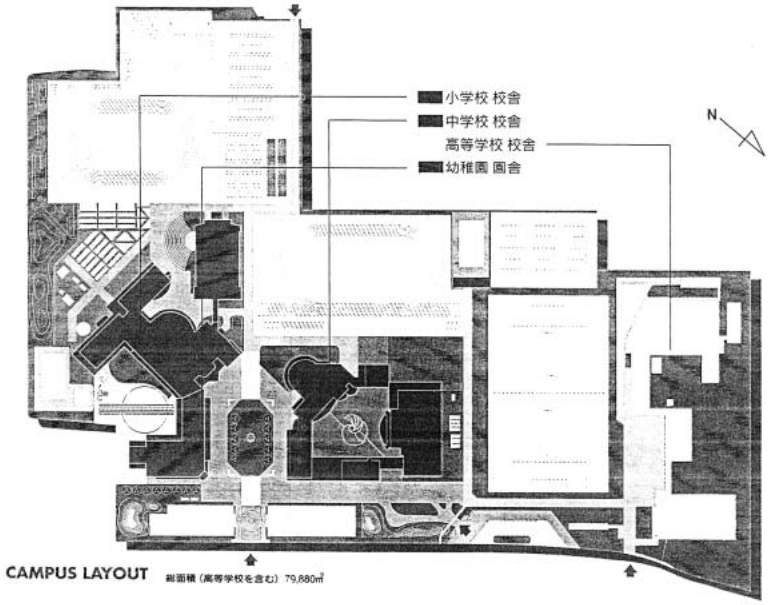


図１４－２　平和町キャンパス校舎　平面図

写真１４－２　平和町キャンパス

写真１４－３　養護学校「すずかけの家」

（3）残された課題

平和町への移転構想が打ち出されてから13年の歳月を経て、幼・小・中の３校園の移転は実現したものの、まだ多くの課題が残されている。

まず第１に高等学校と養護学校の校舎新営が将来計画として残されていることが挙げられる。附属学校園の改革と連動させながら、新たな将来計画の策定を急ぐ必要がある。

第２に1990（平成２）年に策定した『一貫した教育方法の研究推進のための教育環境整備と統合移転構想』の中に示されている基本理念を、どのように実現していくのかという課題である。そのためには、統合移転構想実現の中核をなす組織である附属学校園研究部が更に機能し、具体的なプランを提言していく必要があろう。

第３には、附属学校園がその使命を果たすために、教育学部とどのように連携を強めていくかということが挙げられる。先導的、開発的な研究を推進するに当たって、学部教官の指導は不可欠であるし、教育実習を進めるに当たって、事前指導のカリキュラム実施には、附属学校園教官も参加することが望ましい。また、学部教官と附属教官がそれぞれの専門分野を生かした講義を、学部教官は附属学校園で、附属教官は学部で行うといったような、具体的な連携の構想と方策を打ち出し実現していくことが急務である。

教育改革の大きな波の中で、1998年に出された中央教育審議会の答申や教育学部の将来計画と関連付けながら、附属学校園がその使命をどのように果たしていくか、どのように改革を進めるか、重要な課題は多い。

２　附属小学校

（1）沿革

附属小学校創設に至るまでの変遷

附属小学校の前身は石川県師範学校附属小学校である。その歴史は1874（明治７）年の石川県集成学校（師範学校）附属小学校に始まる。この年の10月２日、仙石町（現中央公園入り口付近）にあった公立仙石町小学校を附属小学校に充てることで創立された。その後、すぐに集成学校が師範学校と改称された時点で、石川県師範学校附属小学校として発足した。1877年、校舎の老朽化に伴い、師範学校の新築と同時に広坂通りの現中央公園と県庁舎の間辺りに移った。1888年、師範学校の場所に第四高等学校が設置されることになり、師範学校と附属小学校は県庁舎向かいの広坂１丁目（旧広坂校舎跡地）へ移転した。これ以降100年余りにわたり、広坂での歴

写真１４－４　広坂木造校舎

史と伝統を築いていった。

1913（大正２）年４月、石川県師範学校（男子）が現在の弥生１丁目へ移転し、男子師範附属小学校も２年後に弥生（現金沢市立弥生小学校）へ移転した。1914年２月、新たに石川県女子師範学校が石川県師範学校から分離設置されることとなり、広坂の校舎を使って開校した。1915年、同じ校舎に石川県女子師範学校附属小学校が男子師範附属から分離新設された。

1941（昭和16）年、国民学校令の施行に伴い両附属小学校は附属国民学校と改称、1943年、師範学校が文部省直轄学校となるに伴い附属小学校も官立となった。

1947年、６・３制教育制度改革により、校名も石川師範学校男子部附属小学校、同女子部附属小学校に戻り、同時に中学校が両校から分離した。同年に師範学校令が廃止され、師範学校が総合大学教育学部へ移行することになったため、男女両師範学校が共学制となり、これに合わせて男子部、女子部両附属小学校も合併することになった。一本化に当たってはかなりの紆余曲折があったが、弥生の男子部附属小学校校舎は金沢市立野町小学校弥生分校となり、広坂の女子師範学校校舎に小学校、中学校、幼稚園が入ることになった。石川師範学校附属小学校として入学式が行われたのは1949年４月８日であった。児童は旧男子部附属小学校からの希望者と旧女子部附属小学校を合わせて18学級719名と特殊学級１学級で発足し、初代主事には澤田幸平が就任した。広坂校舎は幼・小・中の３校園が入り手狭な上、1889（明治22）年に移築された木造校舎で老朽化が激しく、学習上不便を極めた。同年５月31日の金沢大学創設に伴い、校名も金沢大学石川師範学校附属小学校となった。

このころは戦後の混乱期であったが、附属小学校は新しい教育を求めてたくましく実践を試みている。終戦の翌年の1946年に女子部附属小が新教育への発足を題目に掲げて研究発表会を開催したところ、3,000人もの参会者をみた。中でも、学習形態がディスカッション・メソッドのものや学級自治会の公開授業が、戦前の学校教育にはなかったものだけに人気を呼んだ。このように先が見えない混迷の時期にあっても、新しい教育の姿を求める石川師範附学校属小学校の姿勢が、間もなく誕生する教育学部附属小学校へ引き継がれていった。

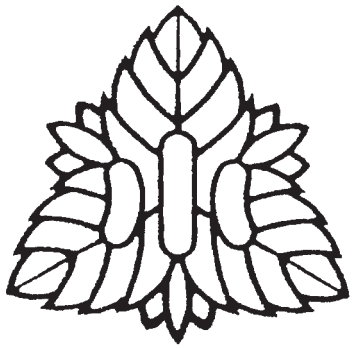


図１４－３　小学校校章

教育学部附属小学校の発足

金沢大学教育学部は1949年５月に創設されたが、前身の石川師範学校は在籍学生が卒業する1951年３月まで存続した。この２年間は師範学校と教育学部とが並存する形だっ

たが、1959年４月１日石川師範学校の廃止に伴って、校名は教育学部附属小学校となった。初代校長には引き続き澤田幸平が就いた。

校章は1949年に「かしわ」の葉を形取ったものが制定された。これは、昔校庭にかしわの名木があり、雄々しさと質実さを校風にしたいという意図もあって選定された。制服もこの年に定められ、新入生から順次着用することとなった。校歌は作詞を附属高等学校の校歌も手がけている室生犀星に、作曲を信時潔に依頼し、1953年に完成した。男女両附属小学校統合された際に最も問題となったことは、新しい教育計画を立てることであった。およそ１年間の討論を経て1950年６月に第１回教育研究発表会を２日間にわたって開催し、カリキュラム構造と学習指導法について発表した。

校舎の改築と設備の充実

手狭で老朽化した広坂校舎の改築は1951（昭和26）年10月に決定し、第１期工事として６教室の建築が行われた。以降、1954年に第２期、1955年に第３期工事が完成し、普通教室18と一部の特別教室が出来上がった。順次、３階建ての新校舎へ移転したが、校舎の一部が改築中の中学校の教室に充てられたり、特別教室が不足していたりした。また、特殊学級や幼稚園舎は木造のままで、整備されたとはいえまだまだ不十分であったことから、当時の薄田校長は校舎建設の促進のために上京し、文部省に窮状を訴えた。そのかいあって1961年、第４期工事として知事公舎側に特別教室棟が増築され、児童玄関も市役所側入り口正面に設けられた。1962年５月15日には小中学校の新校舎落成式が行われ、11年に及ぶ改築工事は終了した。改築と同時に校内の施設も充実し、音楽室には50台の

写真１４－５　旧広坂小学校校舎

ディスクオルガンが備えられたり、100万円をかけて画期的な校内放送設備が整えられたりした。また、アナライザーを導入して授業分析を行う研究授業も大いに試みられた。

特殊学級は1949年に創設された。当時の国立大学附属小学校には知恵遅れの子どものための学級はなかったといわれている。その後、特殊学級では独自の研究主題を定め研究発表会を重ねてきたが、1964年附属養護学校として独立した。

同じ年、文部省からの開設要請を受け、３・４年複式学級が発足した。３年４年とも大体８名ずつで編成されたが、その後、12名ずつの24名となり現在に至っている。複式学級ではまずカリキュラム編成に研究の主眼が置かれた。引き続いて効果的な学習指導法の実践研究が続けられ、教育機器の活用も積極的に試みられた。また、公立小学校の複式学級との交流も続けられた。

一方、校舎の設備充実はその後も続けられ、運動場の拡張や校内テレビ放送設備が整備された。中でも画期的なのは授業研究室の設置である。これは教育実習と授業研究を目的として、児童の反応分析やその記録、教材提示などの機器を一体化したものを備えた教室で、1971（昭和46）年に完成した。その後、教育学部附属教育工学センターと有線で結ばれ、大学にいながら附属小学校の授業がテレビ画面を通して参観できるようになり、授業分析や教育実習の事前指導に活用された。

入学選考方法の変遷

１年生の入学選考の変遷は厳正かつ公正を第一として行われてきた。本校への入学希望者で附属幼稚園在園児は書類審査のみの選考が行われているが、入学定員の残りについては金沢市在住の志願者の中から選考された。選考方法は、石川師範学校附属のころから個別の面接検査が取り入れられていた。ところが、1969年度入学生からは第１次選考では従来のように各種面接検査を行い、その合格者の中から抽選で最終合格者を決める第２次選考が行われるようになった。これは、各地の国立大学附属校で入試に絡む疑惑が問題化したこともあるが、当時の小松校長の「附属小学校の任務を省みたとき、異なった素質と環境を持った児童によって学級を編成し、公立学校により近い条件の下で教育研究や教育実習を行うべきであろう。」という考え方によるところが大きい。それ以来、この２段階の選抜方法が採用されている。

公立学校との人事交流

1970年代に入ると附属小学校教官と公立学校教諭との人事交流が盛んになってきた。長年にわたって附属で培ってきた優れた資質や能力を地域の教育界に還元するとともに、県内各地から将来有望な若手、中堅教員を附属に招き入れ、附属に斬新な風を吹き込んで先進的な研究の活性化を図るといった相乗効果を期待するものである。現に、附属小学校から公立学校へ転出した教官の多くが、それぞれの地域の教育界の各分野で中心的な存在となって活躍している。この方針は教育委員会との連携を強化することにもつながり、地

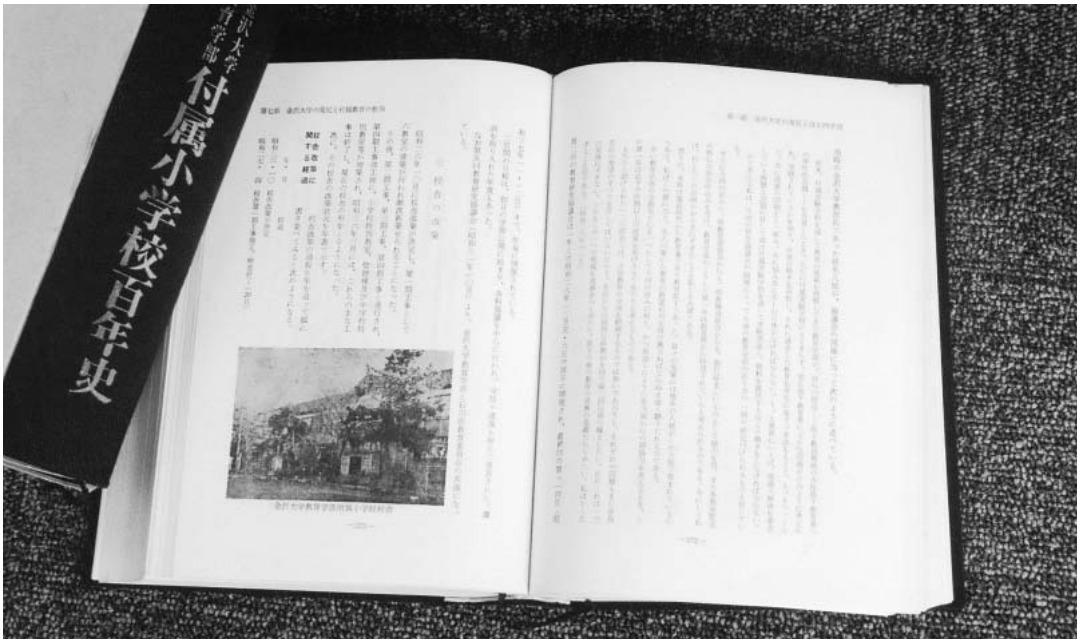


写真１４－６　『付属小学校百年史』

域の教育振興に附属小学校が果たす役割が更に広がってきた。

創立百周年

1974年10月２日、附属小学校は創立百周年を迎え、記念式典並びに祝賀会が盛大に行われた。同窓会である嚶鳴会が中心となり、記念事業として前庭に岩石園が作られたり、正面わきに「師魂」の石碑が建てられた。さらに『付属小学校百年史』が刊行された。これは屋敷道明教諭が中心となり２年がかりで作製されたもので、1,354ページにも及ぶものである。

創立百周年と前後して放送教育全国大会や社会科教育全国大会などの会場校となった。しかし、学習活動が多様化してくるにつれて広坂校舎が手狭となり、実験校としての先進的な教育実践に対応できなくなってきた。

附属学校園の将来計画と平和町への移転

余裕のない校舎の問題を解決するために、1975年に附属学校園長期計画が立てられた。これには老朽化した体育館の改築と、幼稚園跡の木造校舎を取り壊した跡に３階建ての管理棟を建て、多目的教室や教育実習生のための施設を造るものだった。この計画が進まないまま1982年５月に広坂地区将来計画検討委員会が発足し、平和町地区への移転について検討が始まった。委員会を重ねる中で幼・小が広坂地区に残って改築する方向に進んだが、様々な思わくが絡んで計画は進まなかった。

1986年４月14日の朝、運動場に置いてあったサッカーゴールが転倒したことにより、

５年生の児童が意識不明の重体となる事故が発生した。これは手狭な校地のため運動場が小・中共同使用であったこと、それに伴って設備や児童・生徒の管理体制が両校間であいまいだったことに起因していると言われた。この事故をきっかけに学校の安全対策を抜本的に見直すと同時に将来計画の推進がなされた。1987年３月、教育学部長から附属学校将来計画検討委員会に対して、幼・小・中の３校園がすべて平和町へ移転する方向で検討してほしいという条件提示があった。それに対して教官会議ではこれまでの検討の方向と大きく異なることから反対意見が強かった。中でも通学距離が長くなることはかえって児童の安全上問題であることや、金沢市の北部からの入学希望者にとって不公平となるとの考えが出された。同年９月21日の教官会議でも広坂地区を明け渡さなければならない理由が十分に説明されず、また平和町の十分な用地確保の見通しもあいまいなままであった。しかし、幼・中が既に移転を承諾しているという状況もあって、教官会議では平和町へ移転するという小学校の意思表示を「何となく承認」（教官会議議事録原文）という形で行い、移転計画がスタートすることとなった。

新校舎は1994（平成６）年10月に着工、翌年の７月には校舎全体が完成した。夏季休業中に移転作業を終え、２学期から新校舎での生活が始まった。新校舎は次の３点をコンセプトに建設された。

◯ゆとりと柔軟な学習空間の構築　教室に隣接したオープンスペース、多目的に使用できるランチルーム、床面積が広いアリーナ、開放的な吹き抜けと邑井吉治教諭デザインによる大型レリーフ「かしわ葉は歌うよ」のある昇降口など。

◯ゾーンプランニング構想の採用　最適な学習空間の創出を考えた特別教室配置、屋内と屋外を一体化した学習ゾーンの形成、屋外設備の工夫など。

◯新しい学校への指向　校内LANで結ばれインターネットが可能なコンピュータ機器の配置、マルチメディアに対応できる視聴覚機器の設置など。

このような最新の考え方を取り入れた校舎、及び学校周辺の豊富な自然環境を十分に活用し、教育学部との連携のもと、先進的な教育研究や優れた人材を育てる教育実習に成果

写真１４－７　オープンスペース

写真１４－８　コンピュータルーム

を上げるものと期待されている。

表１４－１　年表

西暦・月	事　　項
1949年 5月	金沢大学石川師範学校附属小学校となる。(31日)
(昭和24)	
49年	校章と制服を決める。
50年 6月	第1回研究発表会を開催する。研究主題を「教育課程」とする。
50年	文集『ふじだな』、育友会誌『かしわ木』を発行し、日記『あゆみ』が始まる。
51年 4月	金沢大学教育学部附属小学校と改称する。
51年10月	校舎改築が決定し、第1期工事として6教室の建築が行われる。
53年11月	校歌を制定する。(室生犀星作詞・信時潔作曲)
57年 6月	『自主的学習の指導法』を刊行する。
62年 5月	小中学校の校舎が新築完成し竣工式を行う。(15日)
63年 1月	豪雪により1週間休校する。
64年 4月	3・4年複式学級が発足する。特殊学級が分離し養護学校として独立する。
64年 4月	努力目標を「すすんで学ぶ子ども」「やりとおす子ども」「みんなのことを考える子ども」とする。
69年 9月	校内テレビ放送設備ができる。
70年	教科教育研究会が組織され、学部教官との共同研究や研究交流が始まる。
71年 3月	授業研究室が完成する。
71年10月	放送教育研究会全国大会の会場校として授業を公開する。
72年11月	『発見学習の展開』全5巻を明治図書より刊行する。
74年10月	附属小学校創立百周年記念式典が開かれる。(2日) 『金沢大学教育学部付属小学校百年史』を刊行、前庭に岩石園を設置する。
78年10月	全国小学校社会科研究協議会金沢大会の会場校となる。
79年 9月	校内テレビ放送設備をカラー化する。
87年 5月	授業研究室を集会室に改装する。
93年 5月	ソニー教育資金贈呈優秀校として受賞する。
94年 6月	附属学校統合移転整備事業建設工事起工式が行われる。
94年11月	全日本音楽教育研究会全国大会の会場校となり授業と音楽集会を公開する。
95年 9月	平和町新校舎へ移転、授業を開始する。
95年11月	全国視聴覚教育研究大会の会場校となり、授業を公開する。
95年12月	附属学校園舎完成記念式典を挙行する。
96年11月	国立大学教育実践研究センター協議会会場校となる。
97年11月	石川県理科大会会場校となり、授業を公開する。

(出典『付属小学校百年史』及び『学校沿革誌』)

(2) 教育研究の変遷

附属小学校の教育研究の始まりは男女両師範附属小学校合併後、「カリキュラム構造と学習指導」の研究主題の下、懸案の教育課程表を作成し、1950(昭和25)年第１回教育研究発表会を開催してこれを公表した。

1952年度からは「自主的学習のあり方」を研究主題とし、戦後の日本の再建につなが

る課題として戦前の受容型の教育から自発的自主的に日本を背負う人間の形成を目指すこととした。８年間の研究の中で、発達心理学の立場から理論と指導の実際や、自主的学習の相と指導の条件などについて明らかにし、1957年『自主的学習の指導法』として出版した。その後も自主的学習と系統学習との両立の研究などを続け、1960（昭和35）年６月の第20回教育研究発表会で終了した。

表１４－２　教育研究主題一覧

研究年度	研究主題
1949(昭和24)年	カリキュラム構造と学習指導
50年	指導と評価
51年	現実課題と学習指導
52年～　59年	自主的学習のあり方
60年～　63年	一時限の指導の研究
64年～　68年	教材の見直しとその指導
69年～　72年	発見学習の展開
73年～　76年	個性化をめざす教室経営
77年～　80年	よろこびを生む授業
81年～　84年	豊かさ確かさを求める授業
85年～　88年	自己教育力の育成
89年～　92年	自己を拓く
93年～　96年	自己創造的表現
97年～	教育課程の創造

1964年度からの「教材の見直しとその指導」では、研究の基盤として、まず教育目標の再吟味がなされ、「すすんで学ぶ子ども」「やりとおす子ども」「みんなのことを考える子ども」の三つを努力目標とした。研究は、まず「何を」という教育内容に重点を置いて教材を見直し、次に「何を」と「どのように」を密着させて授業を進めることに主眼を置いた。この研究の後半３年間は、当時の命題であった教育現代化の方向を受けて、課題解決学習の研究に力点が移された。課題解決学習の一般的な過程を「課題化」「解決」「定着」とした。また、本校の課題解決学習の特質として、知識と学習方法と意識が統一された総合的な学習力を育てること、教材構造が作られる過程を教育的に再編成し児童にその過程を歩ませる発見的な方法を大切にすること、個と集団の調和を図ることの３点が挙げられた。

1969年度からは「発見学習の展開」を研究主題とした。発見学習は、課題解決学習の研究の延長上に存在しており、精選された教材内容を獲得させるには仮説的方法が効果を持つという考えに立ち、仮説を累積的に構成し、そこに規則や相互の関係などを発見しながら情報を操作していくという仕方である。その基本的な学習過程は「課題をとらえる」「予想を立てる」「仮説に高める」「確かめる」「発展する」の５段階を基本形としたが、発達段階によって過程の工夫が行われたり、教科の特性に応じたモデルが作られたりした。このようにあくまで基本的な考え方の枠内で、多様な変形の過程が作られた。1971年10月には放送教育全国大会が金沢市で開催された。会場校の一つとなった本校では「発見学習と放送教材の活用」をテーマとして掲げて公開授業を行った。翌年11月には『発見学習の展開』（明治図書）を出版した。これは教育学部の水越敏行助教授と附属小学校の共著で、国語、社会、算数、理科及び音楽・図工・家庭・体育の各教科編全５巻であった。この出版に合わせて第23回教育研究発表会が開催され、全国から多数の参会者をみた。

この後、1973年度から始まった「個性化を目指す教育経営」では、「発見学習の展開」を学習主体である児童の側から見直し、深化することによって個性化を図るとともに、教科外の領域を含めた教育活動全体を見直して児童の個性を豊かに伸ばそうという方向で研

究が進められた。その中で総合活動を取り入れ、学校行事・教科学習の発展・児童の生活を内容とする特別活動と位置付けた。総合活動の重点目標として、「楽しく豊かな学校生活をするために」「一人一人を生かす場として」「集団行動における望ましい態度を育てるために」「教科学習の発展・統合として」の４点を挙げている。また、学年ごとに基本目標と計画・実施・整理の各段階における具体目標を設定した。さらに、一つ一つの活動をプロジェクトととらえ、全校的なもの、学年学級単位のものを組み合わせて総合活動年間カリキュラムを作り上げた。

写真１４－９　「発見学習の展開」

「自己教育力の育成」を研究主題とした1985年度からは校内に研究部という組織を作り、従来のように研究主任が研究理論を構築し提案してきたのを改め、研究主任を中心に研究部員が研究理論を検討・作成し、全体に提案するシステムに変わった。その結果、研究の継続性や広まりという面で効果が上がった。このような組織の下、臨時教育審議会の答申で21世紀の教育改革の中心に自己教育力の育成が盛り込まれたことを受けて、学び取る力を持った子どもを目指す児童像に据え、問い直しや再吟味によって追求を深めていく「ゆれのある学習」の研究を進めていった。

1997年度からは中央教育審議会の答申にうたわれている、社会の変化に伴う教育に対する今日的課題に対応するため、教科内容を厳選し、総合的な学習を組み入れたカリキュラムを創造する「教育課程の創造」を研究主題とした。総合学習には環境や人権、福祉、国際理解、伝統文化、生命、情報教育などの内容を組み込むとともに、英語活動も試みている。また、この年度より教育研究発表会の開催時期を５月から11月に移すことにより、４月までに研究理論を作成しその後の実践を踏まえて秋に研究成果を発表するという研究サイクルに変更した。

（3）教育実習

表１４－３　教育実習生受け入れ状況

年度	1985（昭和60）	86	87	88	89	90	91
人数							
前半	120	124	122	123	110	110	6月148
後半	119	137	123	123	108	104	10月 47

年度	92	93	94	95	96	97	98
人数	163	124	124	120	102	114	96

＊1991年から6月に4週間の基礎実習となった

教育実習は師範学校附属小学校のころは最終学年に10週間行われ、各学級に約３名が配属されていた。教育学部附属小学校となってからは、附属小学校で基本実習４週間、協力校で応用実習１週間で、実習時期は一部甲類は４年の６月、一部乙類は４年の10月であった。１学級に配属される実習生数は1960（昭和35）年ごろまでは３名程度だったが、次第に学生数が増えたことにより1967年には学生数が100名を超え、学級配属も５～６名となった。1975年からは附属小学校で３週間の実習の後、協力校で１週間の実習となり、1977年には附属小学校で２週間、協力校でも２週間の実習に変わった。1979年以降はこの実習が３年前期で行われるようになった。さらにこのころから４年前期の学生で小学校免許を副免とする者も２週間の実習に来るようになり、実習生数は６月前半・後半とも130～140名を数え、各学級に配属される実習生は高学年では８名に増えた。その結果、６月中に実習に来る学生数は前・後期合わせると260～270名となり、きめ細かな指導が十分にできない状態が生じただけではなく、指導教官の労力も相当なものであった。また、後半の実習は、はじめて実習を行う３年前期の学生と他校種での実習経験がある４年前期の学生が混在していることで、指導がやりにくいということも指摘されていた。このような状況でも学生の実習に対する意気込みは高く、夜遅くまで指導教官と教材研究や教材作りを行う姿が見られた。中には小学校の校舎

早いもので１週間が過ぎた。教生の中には疲れている者もいるようだ。でも，子供の前では疲れたとかひどいなどとは言ってはおれない。私達には根性と体力と若さがあるのだから，体ごとぶつかっていかなければいけない。ベテランの先生には負けられない。

教育実習を１週間終えて，「教育」という漠然とした言葉が少しだけ具体的に見えてきたような気がする。

（５年３組担当　Ｍ子）

図１４－４　「教育実習当番日誌」より（1987年）

が施錠された後も、城内キャンパスの学部演習室へ仕事を持ち帰り、深夜まで授業準備に追われることもあった。

1991年からは３年前期に、４週間の主免基礎実習を原則として附属小学校で行うこととし、副免で小学校免許を取得する学生については、４年前期に金沢市内の公立協力校で実習を行うことになった。実習が４週間になったことで、児童の実態を踏まえた指導の在り方や教材のとらえ方などについて、ゆとりを持って指導できるようになった。1998年からは教育学部の改組に伴う学校教育教員養成課程の実習生となり、さらに教室配属学生が減少することから、より充実した教育実習が行えるようになろう。しかし、一方では少子化の波が教員の採用を困難にしている現実があり、学生の実習にかける意気込みが今一つ盛り上がらないのが実態である。

養護教諭（特別別科）の教育実習は、1964年より開始された。現在では１月に４週間、３～４名の実習生を受け入れている。

（4）学校行事・学校生活

ふじだなおとぎ会

毎年５月の連休明けのころ、満開となった校庭のふじ棚にまん幕を張り、多くの保護者の参観の下、ふじだなおとぎ会が開かれる。歴史は古く1889（明治22）年にさかのぼり、中庭のふじ棚とともに附属小学校を象徴するものの一つになっている。学年ごとに集まり、児童の司会で創作童話や昔話、紙芝居などを聞き語る会で、子どもたちはこの日に備えて

写真１４－１０　ふじだなおとぎ会（広坂校舎）

物語を覚えたり、身振り手振りを交えて話す練習を重ねたりする。この行事は児童の表現力を高めるばかりではなく、心温まる話を聞くことにより心豊かな人間性や感性の育成にもつながるものである。

運動会

例年９月に行われている運動会の歴史も古く、1904（明治37）年に師範学校や幼稚園と合同で行われたことに始まる。1950年ごろには春にも小運動会が開催された。附属小学校となってからも幼稚園と合同で運動会を開催していたが、平和町校舎へ移転後は幼稚園にも運動広場が確保されたことから別開催となった。本校の運動会の特色として表現がある。これは音楽や打楽器に合わせて風や波、水の流れなどの情景や、驚きや喜び、悲しみといった心情を、ある場面では全児童が一体となって、またある場面では一人一人の児童が体全体を使い表現する集団演技である。指導教官の熱意と児童の努力の結晶である表現については、高い評価を得てきた。

夏季合宿

1963（昭和38）年までは高松海岸で臨海生活という名称で夏休みに入ってから行われていたが、当時県内で水難事故が相次いだために海での活動を取りやめ、場所を青年の家や国民宿舎に移して５年、６年がそれぞれの場所で合宿を行うようになった。その後、各地に開設された県立少年自然の家や国立能登青年の家を使って、自然に親しんだりルールを守り助け合って集団生活を行う体験活動が盛り込まれた。児童にとっては学校生活の中では思い出に残る行事であるが、学校週５日制実施に伴う授業時数確保などの影響で、ほかの学校行事と同様に簡素化、縮小化が進められている。

スキー遠足

1955（昭和30）年ころから、スキーや竹スキー、そりなどを使ってスキー遠足が実施されてきた。1976年までは大乗寺山で、1977年からは鳥越高原大日スキー場や一里野高原スキー場で行われていた。1984年からは５・６年生がキゴ山の医王山スキー場を使い、医王山スポーツセンターに１泊するスキー合宿となり、冬季の重要な行事となった。1992（平成４）年１月、５年生のスキー合宿に引率した矢部俊政校長は、スキー場で児童に準備運動を指導している最中に倒れ、救急車で医学部附属病院へ運ばれたが、心臓麻痺で帰らぬ人となった。このようなことや行事の簡素化もあって、1994年からは再び大日スキー場へのスキー遠足に戻った。

生活日記『あゆみ』

３年生以上の全児童が『あゆみ』で毎日の生活日記を書くようになったのは1950年からである。現在１年生は『あのね』、２年生は『あしあと』と呼ばれている１枚日記を書い

写真１４－１１　生活日記『あゆみ』

ている。『あゆみ』の形式はほとんど変化なく、１ページが上段と下段に分かれている。上段には学校での学習の様子や家庭への連絡事項が記入できる。下段は１日の学校や家庭、社会の生活を振り返って、したこと、見たこと、思ったことを自由に書きつづるようになっている。その日の題材を何にするか、子どもたちにとっては大きな課題であるが、『あゆみ』を継続して書くことによって、児童の表現力や思考力、豊かな感性を育成することができる。それだけではなく学校外の生活の実態や児童の相談事や疑問、ものの見方や考え方などを担任が知って適切な対応をすることができ、学級経営や生徒指導にとっても有意義なものとなっている。

また、書き終えた『あゆみ』を１年分まとめて製本し、表紙に学年・組・名前を入れることもできるようになっている。卒業生の中には、小学校の楽しかったことや苦しかったことなどを詰め込んだ思い出のものとして、大切に保管している者も多い。

文集『ふじだな』

全児童の作文や詩などを掲載している文集『ふじだな』は1950（昭和25）年に第１号が発行された。当時は年間３回発行されていたが現在は年間１回となった。学年ごとに詩、意見文、生活文などジャンルを分け、国語科の学習内容と関連を持たせながら書くようになっている。これは表現領域として文章表現力を高め想像力を豊かにするとともに、ものの見方や考え方、感じ方を深めていくというねらいがあり、生活日記『あゆみ』と共通する部分である。さらに、児童が友達の作品を読むことを通して、表現の良さに気付いたり、ものの見方や感じ方の違いを感じ取ったりすることにより、更に自分が高まる手掛かりとなることも期待できる利点がある。

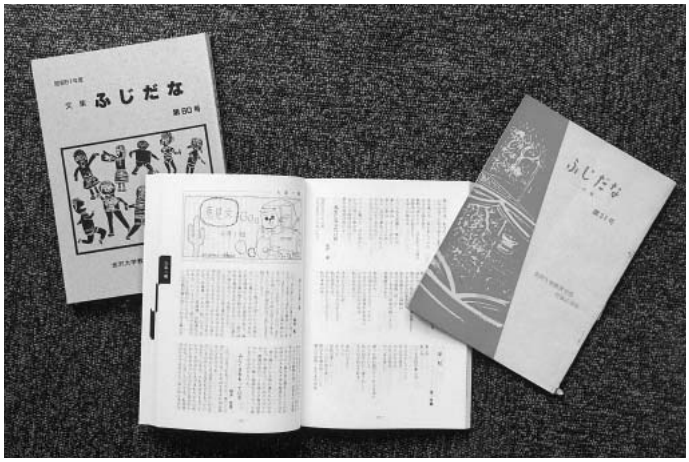


写真１４－１２　文集『ふじだな』

１年生のランドセル廃止

1967（昭和42）年に１年生のランドセルが廃止された。これはバス通学する１年生にとって重くて大きなランドセルに教科書やノートを詰めて通学するのは負担が大きいことと、何よりも１年生の間は家庭は学校教育の延長ではなく、心身を健全に成長させる基本的な生活習慣を身につけることが第一であるという考えからである。廃止当時、保護者の一部には不安の声があったが、学校側の趣旨が理解され現在も続いており、１年生は思い思いの肩掛けカバンの中に筆記用具や連絡帳など最低限の学用品を入れて登校して来る。

巣立ちの像と卒業記念

広坂校舎の小学校正面入り口には「巣立ちの像」があった。平和町校舎では２年生のオープンスペース外の中庭に移動した。この像は1971年度卒業生から贈られたもので、附属中学校美術担当の山瀬晋吾教諭の制作によるものである。像は２人の子どもが鳩を手にしており、天を指す男子の像は未来への希望を、腰をかけ鳩を降り仰ぐ女子は平和への願いを込めているものである。この巣立ちの像の台座には、本校の三つの努力目標が刻まれた金属板がはめ込まれているが、これは1969年度卒業生から贈られたものである。

写真１４－１３　巣立ちの像

これら以外にも卒業記念品は数多く残されているが、毎年の卒業生の氏名を青銅版

に彫ったものもその一つである。現在は職員・来客用玄関の壁面に展示されているが、卒業生が母校を訪れた際には自分の名前を探す光景がよく見かけられる。広坂校舎正面玄関にあった校章は1965年度卒業生が贈ったもので、現在はランチルーム正面の壁面に飾られている。また、1966年度卒業生からは、現在も儀式に使用されている校旗が贈られた。1968年度卒業生が贈った校歌の額は附属中学校の横西清（霞亭）教諭に依頼し制作されたもので、体育館の正面に掛けられている。1972年度以降の卒業生が記念植樹した「かしわ」の木は、広坂校舎前庭から平和町キャンパスのふれあい広場へ移植された。小学校同窓会の嚶鳴会から贈られた「くすのき」とともに、ふれあい広場の芝生を取り囲み、心地よい木陰を作っている。

3　附属中学校

（1）沿革

発足のころ

1947（昭和22）年４月、新学制に伴い石川師範学校男子部附属小学校・同女子部附属小学校にそれぞれ附属中学校が併設された。石川青年師範学校も附属中学校を開設した。現在の附属中学校の前身と言えるものである。

1949年４月、前記の附属の３校が統合され、石川師範学校附属中学校が開校した。主事には永守良治（石川師範学校教授）が任じられた。校舎は金沢市広坂通りに位置し、これは女子部附属小学校校舎だった。ロの字型の木造校舎で、正門を通るとアーチをくぐるモダンな建物であった。このアーチは中庭にあった松の木とともに卒業生の心にいつまでも残る思い出となっている。同年５月、金沢大学設置により、金沢大学石川師範学校附属中学校と改称。生徒会、育友会が相次いで発足し、10月18日には、開校記念式、

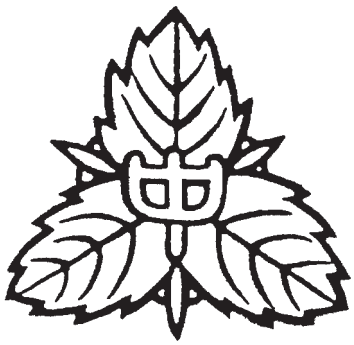


図１４－５　中学校校章
柏葉。「みつがしわ」とよばれるもの。柏は古来、樹神・葉守の神の宿る木と考えられてきた。柏葉会（同窓会）、柏樹（生徒会文集）、柏樹ホール（多目的ホール）、柏樹タイム（総合学習）など、多くの名称に柏が使われている。

写真１４－１４　広坂旧木造校舎（発足のころ）

祝賀会、生徒父兄作品展示会、運動会が行われた。

校　歌

作詞　尾山　篤二郎
作曲　信時　潔

春風そよろと　かしわの若葉に
朝かげさすとき　花かとおどろく
われらが校章　ひたいにかぐわし
伝統はるけき　ああ光栄ある
金沢附属中学校

写真１４－１５　平和町校舎全景

校舎の整備・施設の充実（広坂校舎）

1951（昭和26）年３月には、教育学部に附属学校を設置、金沢大学教育学部附属中学校と改称された。４月には永守良治教授が初代校長となった。このころから附属小学校とともに広坂校舎改築の機運が起こってきた。この年、他校に先駆け「学校放送」を開始している。1953年には「幻灯機」を購入し、図書室で投影して学習効果を挙げるなど種々の機器を利用し、新しい時代に沿った教育を目指した時代であった。

1957年から５年間かけて、老朽化した木造校舎を鉄筋コンクリート３階建ての新校舎に改築している。改築の経過は次のとおりである。

1957年…普通教室６教室完成

1958年…普通教室残り６教室完成

1960年…理科、図工、職業、音楽の特別教室完成

1961年…新校舎へ移転

1962年…体育館完成　新校舎竣工式

木造校舎の前庭に新校舎が建てられ、中庭の松の木は、運動場に位置することとなった。この松は夏には木陰を作り、冬には雪の重みに耐え、広坂校舎に学んだ附中生には決して忘れることがないシンボルとなっている。

運動場の辰己用水側に、女子師範学校時代からの「白梅寮」（金大女子寮）があったが、市内泉野に新築されたので、1968年運動場拡張整地が行われた。しかしながら、小・中学校共有の運動場は十分な広さがなく、危険性も指摘され平和町への移転の要因の一つとなった。

1970年、全国放送教育研究大会の会場校に指定され、スタジオを備えた放送室が完成し、同時に設備の更新・充実が図られた。

1971年には技術・家庭科棟が体育館横に新築され、記念館は大学本部に移築された。また、元の家庭室は２等分され小学校家庭室と中学校会議室に改装された。技術室は製図室としてその後も使われ、1975年に諸機能を備えた視聴覚室として改装されている。広坂校舎は３期にわたり建設されたため、老朽化が進むに従い各工期のつなぎ目部分からの雨漏りに悩まされた。半面、大変丁寧な施工で、教室間は30cmもあるコンクリート壁で防音効果は非常に高かった。

写真１４－１６　移転前の広坂旧校舎

平和町移転と新しい教育に向けて

1990（平成２）年、幼稚園・小学校・中学校・高等学校が同一のキャンパスに集まる全国でも例のない新しい学園造りを目指して、将来計画検討委員会で「基本構想」及び「キャンパス構想」を完成した。従来の「詰め込み式」教育から「個性の重視」「生き方に関わる教育」へと教育の方向が大きく転換しようとしていた時期で、中学校・高等学校では次の

写真１４－１７　平和町新校舎

ような共通理解の下で新校舎の青写真が描かれた。

○将来を見据えた校舎造りをする。特に、変化が著しい情報関係の対応を考える。

○地域に開かれた学校。

○教育実習校、教育研究校としての十分な施設、設備を整える。

○両校で共有の教科専用教室、体育館コートを準備することで専門性を高め、個性の伸長を図る。

表１４－４　年表

西暦・月	事　　項
1949年 4月（昭和24）	新制大学発足に伴い石川師範学校男子部附属中学校、同女子部附属中学校、石川青年師範附属中学校を統合し、石川師範学校附属中学校として金沢市広坂1丁目2番30号に開校。主事は永守良治氏。
5月	金沢大学石川師範学校附属中学校と改称。育友会結成。
10月	開校記念式を挙行。「蛍雪新聞」を創刊（生徒会）。
50年 6月	第1回研究発表協議会。主題は「本校教育計画について」。
51年 4月	金沢大学教育学部附属中学校と改称。初代校長・永守良治氏。
6月	道徳教育を中心に研究発表会を開催する。
52年 5月	科学研究生制度を設ける（～1960年）。
11月	生徒会誌「柏樹」を創刊。
53年 3月	校歌を制定。
10月	創立5周年記念式典。
55年 5月	研究紀要を創刊する。
57年 3月	6教室が新築される。1年後に残りの6教室新築完成する。
58年 5月	「中学校教育上の諸問題」で研究発表会（継続）。
10月	創立10周年記念式典。
60年 3月	特別教室が新築完成する。
62年 3月	体育館が新築完成する。（ステージの新設完成は1964年3月）
68年 3月	運動場の拡張工事が完成する。
10月	創立20周年記念式典。讃歌を制定する。
71年 2月	技術家庭科棟が新築完成する。
10月	放送教育全国大会の会場校となる。
72年 6月	新課程「必修クラブ」の研究に取り組む。（1973年5月に研究発表）
75年 6月	「教科教育におけるより確かな指導を目指して」をテーマに研究を開始する。
78年10月	創立30周年記念式典を行う。『附中のあゆみ三十年』を刊行。
84年 6月	「個をとらえ 個を活かす」をテーマに研究が始まる。
87年 6月	「自らを育てる力を求めて」をテーマに研究が始まる。
88年10月	創立40周年式典を行う。
93年 6月	「今を見つめ明日を創る生き方を求めて」をテーマに研究が始まる。
94年 4月	附属学校園統合移転整備事業建設工事起工式が行われる。
11月	全日本音楽教育研究大会全国大会の会場校となり、授業を公開する。
95年 9月	平和町1丁目1番15号へ移転。8日に落成式を行う。
96年10月	全国中学校社会科教育研究大会の会場校となり、授業を公開する。
97年10月	東海北陸英語研究大会の会場校。
11月	石川県中学校理科大会の会場校となる。

（出典『附中のあゆみ三十年』及び『学校要覧』）

しかしながら、1993（平成５）年に高等学校の改築が延期になり、中学校単独では専用教室及びコート案は実現することができなくなった。改めて基本構想を生かした新校舎のプランが作成された。

○読書する場から、資料をひもとき学習する場としての図書室。

○生徒用40台のコンピュータを備えたCAI教室及び同準備室と、将来に備え校内LAN用にイエローケーブルを配線する。

○各教科の研究室には、教育実習生のためのスペースを確保する。

○本校体育施設を地域に開放する。

1994年４月に起工式を行い、1995年８月に広坂から平和町への移転を完了し、２学期の始業式を新校舎で行った。

（2）教育研究

研究分野の変遷と先導試行

1950（昭和25）年に、教育学部附属中学校として第１回目の研究発表協議会を行っている。その後10年程は、附属中学校が現在の県教育委員会、教育センターとしての役割も担っていた期間であった。そのため研究テーマには、「教育目標の設定と教科課程の編成」「学級経営」「学習指導と評価」など、戦後の新しい教育の方向を示す内容を含んだものが多くなっている。

1960年～1962年までは改訂された学習指導要領に関する発表が続き、1963年から本校の研究発表会はその発表内容が大きく変化している。「教育上の諸問題」という統一テーマで、教科ごとの日々の実践・研究を発表する場となった。そのため従来はなかった「教科別分科会」が、１日目の２時間の公開授業の後で開催されるようになっている。また２日間にわたって開かれていた発表会は、1966年から１日だけの開催になっている。1971年の放送教育全国大会、1973年の指導要領改訂により新しく授業の中に組み込まれた「必修クラブ」について、などの発表もあるが、1984年までは教科ごとの日々の実践・研究の発表が続いた。

1985年、学校統一テーマが再び設定され「個をとらえ 個を活かす」となった。学校保健、教科外指導も含め生徒の学校生活全体に関する研究発表が行われている。このテーマは３年間にわたり継続研究され、これ以降も３年間を一つのサイクルとした研究が行われるようになった。

「暗記中心型」「つめ込み教育」が見直され始め、1988年には「自らを育てる力を求めて」をテーマに研究がスタートしている。1991（平成３）、1992年には新しく導入される「選択教科」を先導試行し発表を行った。1994年からは「生き方」にかかわる研究が始まり、次の指導要領改訂の大きなポイントになるであろう「総合学習」に関する先導的な試行を試みている。

様々な研究の会場校として

附属学校にはいつの時代でも、より確かな教科指導の方法と時代を先取りした実践研究が求められる。と同時に地域の研究の中心としての役割を果たしている。ここ数年間で、全日本音楽教育研究会全国大会、全国中学校社会科教育研究大会、石川県技術・家庭科教育研究大会、東海北陸公立中学校英語教育研究大会石川大会、石川県理科教育研究大会などが本校を会場として開催されている。

（3）教育実習

附属中学校では教育学部学生の中学校教員養成の基本実習を主体として、種々の実習生を受け入れてきた。

５月中旬に教科別オリエンテーションを行い、５月末の本校の研究発表会における授業参観を事前指導の一環として、６月初旬からスタートする。これがこの50年にわたる実習のほぼ一定した形態である。実習生の紹介、生徒指導、保健指導、道徳指導などの講話の時間を経て後、実際に授業担当として教壇に立つのである。指導案の検討、授業の整理と反省など、学生も指導する側も忙しさは格別である。実習の後半には学部教官も参加して研究授業が行われている。また、教科指導だけでなく行事の体験も必要であるとの考えから、実習期間中に写生会や遠足などが実施されてきた。しかし、校外での行事には問題もあり、合唱コンクールだけが実習中の重要な行事になっている。配属クラスの生徒の個性や実態を観察する格好の場であり、実習生の合唱もプログラムを盛り上げるなど、若い息吹にあふれる６月である。

写真１４－１８　校内合唱コンクール

教育学部関係の受け入れ状況

1949年：石川師範・青年師範54名の実習を行う。

1950年：石川師範・青年師範18名の実習を行う。教育学部の２部乙類（中学校教員養成２年課程）61名、１部乙類（小学校教員養成２年課程）42名を受け入れる。

1952年：１学期に２部甲類（中教４年課程）52名、１部甲類（小教４年課程）28名を受け入れる。
２学期に２部乙類36名、１部乙類25名を受け入れる。

1957年：甲類（４年課程）のみの実習となる。

1964年：中等科（元の２部）59名、初等科（元の１部）52名を受け入れる。

1967年：養護学校教員・聾学校教員養成課程の中等部実習を、中等科と同時に行う。

1973年：課程の呼称が変更される。中等科は中学校教員養成課程（中教）。初等科は小学校教員養成課程（小教）。

1978年まで中教５期４週間の基本実習を受け入れ、その後の２週間は小教７期のうち中学校教員免許をとる学生を受け入れてきた。（1975年までは１週間）

1979年：多種免許取得可能を目的に、実習６単位を５期で２週（２単位）、７期で４週（２単位＋２単位）の形で２年間にわたって実施するようになった。

受け入れは前半の２週で中教の５期と特体７期、後半の２週で小教７期と特体５期である。1979（昭和54）年の移行措置を経て、1980年より受け入れは４週間に縮小された。しかし、５期と７期が混在すること、２週間で実習生が交代してしまうことなどの悩みが多かった。

1991年：中教５期４週間連続の実習となった。

養護教諭（特別別科）の実習

1963年に開始された時の実習期間は３週間。1965年からは２週間、1976年からは４週間となった。本校での実習生は３～４名であるが、別科全体の事前指導や講話を行った後、金沢市内の協力校に送り出している。現在でも、毎年１月に実施している。

写真１４－１９　養護教諭特別別科の実習

他学部の実習

法文学部・理学部の学生の受け入れで、10月１日から実施するため、「秋の実習」と呼ばれた。本来は附属高校での実習であるが、

表１４－５（１）　実習生受け入れ状況（1979年～1985年）6月実施

中教（中学校教員養成課程）・養教（養護学校教員養成課程中学部）・小教（小学校教員養成課程）

年		1980（昭和55）		81		82		83		84		85	
期		6月2～28		6月1～27		6月1～26		5月30～6月26		6月4～30		6月3～29	
中教	V	47		50		65		37		38		59	
	VII		7	3	4		3	23		16			
養教	V	1				1							
	VII	2											
小教	VII		41		65		72		63		69		56
特体	V		12		6		7		6		6		13
	VII	12		12		12		13		11		12	

表１４－５（２）　実習生受け入れ状況（1986年～1990年）

年		86		87		88		89		90	
期		6月2～29		6月1～27		6月6～7月2		6月5～7月1		6月4～30	
中教	Ⅴ	44		42	38	50		59		52	5
	Ⅶ	27	5	26	10	25	5	22	6	29	11
養教	Ⅴ	2		3		2		1		2	
	Ⅶ										
小教	Ⅴ		63		54		76		63		62
特体	Ⅴ		12		12		12		12		12
	Ⅶ	12		12		12		12		12	

この時期はⅤ期とⅦ期が混在し、2週間ごとに実習生が代わった。

実習生多数のため、その一部を1955（昭和30）年から中学校が受け入れてきたものである。期間は３週間であったが、1975年以降は２週間となった。しかし、1983年からは、原則として出身高校で実習するようになったため、秋の実習はなくなった。1956年のみ薬学部学生も若干受け入れた。

（4）学校行事・学校生活

行事は学校生活にリズムと潤いを与え、友情のきずなを強め、また自己を見つめて明日への飛躍を目指す出発点となるものである。創立以来、生徒の企画能力や自主的運営能力の伸長を図って様々な行事が行われてきた。企画運営の多くの部分を生徒会執行部と委員会が担当し、学級を調整したり指揮したりの活動がある。50年の間、幾度か精選の声が上がったが、机上の学習に代えられぬ貴重な価値を再確認している。

1997（平成９）年現在の全校的な行事は次のようなものである。ほとんどが50年の歴史を持ち、その時々に検討と修正を重ねてより良いものへ努力がなされてきた。

１学期　遠足、部紹介、写生会、体力記録会、合唱コンクール、球技大会

２学期　運動会、修学旅行（２年）、遠足（１・３年）、主張大会、文化祭

３学期　球技大会、卒業生を送る会

そのほか、部合宿、１年の一泊合宿、３県附中交歓会などがある。

運動会（９月）

前期生徒会が、総力を挙げて１学期末から準備に取りかかり、種目の編成、係の仕事分担などを自主的に行っている。３学年４クラスを縦割りに４団とし、得点を競い合っている。時代とともに徒競走的な種目は姿を消し、集団競技やゲーム的競技が多くなってきた。棒倒し、騎馬戦は、男子生徒のパワーが全開する競技であるが、攻撃より逃げの騎馬が多い。それに比べ応援や、団の看板・垂れ幕などは年を追って力が入ってきた。ハーフ・タイムショーとして、1960年ころには３年生の仮装行列があったが、競技をしのぐ過熱状

態に至ったために中止された。数年後に、応援合戦として復活。ポンポンを振る女子の華やぎと、男子の豪快な組体操の対比が目を楽しませたが、世相を反映して蛮カラ風は次第に姿を消した。そして1990年代、平成の世には男子も女子も一体となってダンスを繰り広げ、広い空間における表現活動の喜びを満喫している。

写真１４－２０　活発な騎馬戦（1985年9月）

文化祭（11月）

創立以来10月中旬から11月上旬にかけての時期に実施してきた。

第１回の文化祭は、開校記念式典の協賛行事の一部で、バザーのアトラクションとしての性格が強かった。食堂や物品の即売が人気を博し、演劇や学芸会的発表の影は薄かった。番組に「師範の男子部附属、女子部附属、１年」という名称があるのも発足当時の姿を映している。1997年現在、文化祭は、舞台発表・展示発表の２本立てであるが、本校の特徴的な演目について記しておきたい。

写真１４－２１　応援合戦で活躍するチアガール（1990年9月）

演劇　３年生の各学級が脚本選定から上演までの一切を自分たちの手で行い、質の高い舞台は下級生のあこがれとなっている。創立以来、選抜生徒による学年劇の時代があったが、1975年あたりからは学級の団結と協調を図ることが強調され、生徒主体の演出で上演されている。また、1995年の新校舎建築に際して、どんちょう、照明、バトンなどの充実を図り、本格的な舞台が生まれた。

シルエット劇の登場　1982（昭和57）年に誕生し、１年生の学級の取り組みとして定着している。切り絵のシートを２台のOHPで投影するもので、ストーリー

写真１４－２２　1年生の伝統的演目、シルエット劇の準備

写真１４－２３　シルエット劇（1997年10月）

を場面分割し、シート製作の作業、OHP操作、朗読と全員が活躍する。研究発表会のアトラクションとしても参会者の目を楽しませ、本校の誇る表現活動である。平和町に移転後は、近隣の県立平和町養護学校との交流会が開かれ、そのプログラムのお楽しみのメインとなっている。

修学旅行

事前学習を十分に行い、集団行動や共同生活の体験を重視した３泊４日の研修旅行である。1969年までは、３年の１学期に主として東京・伊豆方面へ４泊５日の旅行であったが、その後は、２年の２学期に実施している。目的地は京阪神方面になり、中でも奈良・飛鳥を主に班別自主行動を大きく取り入れることとなった。１学期からの集団訓練・事前学習を経て、現地での見聞、さらには修学旅行の集大成として文化祭に展示発表を行うなど、長期にわたる総合的学習の場となっている。

主張大会

1949（昭和24）年、弁論大会として登場。戦後間もなく言論の自由が盛んに叫ばれたころで、自分たちの生活環境や社会情勢を中心にした建設的なものが多かった。1959年まで続いたが、一時中断。1978年に創立30周年記念行事として再び登場した。全生徒が取り組むもので、学級予選を経て全校大会が開かれている。テーマは自由だが中学生らしい視野の広がりがみられ、1990年代は、地球環境の悪化と飢餓・高齢化社会・人権問題・情報化社会での生き方など、今日的なものが多い。また、1993（平成５）年以降は

優勝者が金沢市大会に出場し、ほぼ毎回優勝杯を手にしている。

（5）部活動、その他の活動

部活動は課外活動として創立時からクラブと称してきたが、1972（昭和47）年から必修クラブ（一斉クラブ）が教育課程に取り入れられたため、区別して「部活動」と称するようになった。全体的に非常に活発で、ほとんどの生徒が何らかの部に所属している。実習生の多くは部活動の活発さに驚いている。附属学校と言えば、知育一辺倒でないか、生徒はひ弱なのではないかという先入観が覆されるわけである。

表１４－６　部活動（1997年）

部活	人数（人）	部活	人数（人）
バレーボール	18	女子バドミントン	25
サッカー	43	男子陸上	21
男子バスケット	50	女子陸上	19
女子バスケット	23	美術	37
男子ハンドボール	25	化学	16
女子ハンドボール	18	ブラスバンド	31
男子テニス	53	英語研究	23
女子テニス	34	読書クラブ	12
男子バドミントン	23	合計	471

部は創立以来あまり変化はないが、50年の歴史の中で、スポーツ系では野球部が1992（平成４）年を最後に姿を消し、卓球部も1996年になくなった。スポーツ系の部活動は、金沢市中体連春季大会、夏季大会兼県体予選会、新人大会などに出場し、市内中学校との対戦に存分の活躍をしている。50年の歴史の中で、金沢のみならず石川県下に附属中の勇名をはせてきたものも多くある。バスケットは1975年ころまで金沢市の大会では常に優勝戦に臨み、幾多の優勝旗を附中にもたらした。1970年には第１回北陸３県大会でも優勝した。そのころからハンドボールが頭角を現し、1996年に男子が北信越大会に出場している。野球部は1986年に市の大会で準優勝。また、中学校におい

写真１４－２４　大会前の激励会（1996年5月）

てソフトテニスが主流を占めている中で、1992（平成４）年からはいち早く硬式テニスを取り入れ、1994年と1997年に全国大会に出場した。

文化系も各種のコンクールや作品展に参加し、化学部は県の科学作品コンクールでも賞を得た。また、合唱部に代わって1980年からブラスバンド部が登場し、学校行事に華やぎと感銘を添えている。市のアンサンブルコンテストにも出場し、高い評価を得ている。

そのほか、活躍してきたものとしては、高松宮杯英語スピーチコンテスト全国大会出場、人権作文コンクール中央入選などがある。また、世界連邦ポスター全国コンクールでは1979年から数年連続して特選を受賞している。

４　附属高等学校

（1）沿革

特別科学学級

1944（昭和19）年12月、文部省の指定により特別科学教育研究班が金沢高等師範学校内に置かれた。特別科学学級とはその教育対象となるクラスのことであり、これが附属高校の前身となる。

1944年末といえば、既にマリアナ諸島を失い、本土空襲が本格化し始めた時期である。特別科学教育研究班は、米軍の圧倒的物量と技術力に対し、科学技術の飛躍的発展による起死回生の戦局の転換を願って設置されたものである。設置箇所は全国５ヵ所、金沢高師のほか、東京、広島各高師、東京女子高等師範、京都府立一中である。金沢の研究班では班長に校長の倉林源四郎自らが就任した。

第１回生には、翌1945年１月、中学校第１学年が入学した。当時の金沢一中第１学年200名の中から16名が選抜された。のち４名が編入して20名となった。1945年４月入学の第２回生は29名、1946年入学の第３回生は16名であった。

科学学級のカリキュラムは、国語、地理、国史の文系科目が大幅に縮小され、数学、物象（物理・化学）、生物の理数系科目が強化された。着目すべきことは、当時、敵国語として排除された英語が重視されたことである。科学学級の生徒は午前中、金沢一中でこれら教科の授業を受け、午後には徒歩で中村町の高等師範学校に出向いた。ここでは、高師の教授陣から直接、物理・化学の実験、生物の実習に重点を置いた理数科の高度な教育を受けた。その程度は、「高等学校（旧制）第２学年修了までの全教育内容を中学校４学年卒業までに理解把握させる」というものであった。

日本の敗戦は、軍事目的で創設された科学学級の大きな転換点となった。金沢高師でも状況の変化に対応すべく「国民生活を飛躍的に向上させ、世界の平和に寄与すべき新科学

文化を創造」すると目的を変更するなど努力している。しかし、結局は「戦後の国内事情の著しい変化」の中で文部省の通達により1946年度で解散となった。ただ、文部省は「科学的素質の優秀な児童生徒に対し、その天分を伸ばすような教育を施すことは科学振興の上から見ても甚だ大切なことであるから、地方により又は学校により自主的に特別の教育を施す」ことを認めた。その特別科学学級の生徒の多くを受け入れて発足したのが、金沢高等師範学校附属中学である。

金沢高等師範学校附属中学から金沢大学教育学部附属高等学校へ

金沢高等師範学校附属中学は、1947年４月に発足し、５月24日付けの官報で正式にその創設が公示された。発足当時の生徒は、新たに募集した中学１年生80名（男女共学１学級、男子クラス１学級）、特別科学学級から編入した２年生から４年生各１学級、合計140名足らずであった。入学式当日に着任していた教官は、小池善男主事らわずか７名であった。校舎も現在自衛隊駐屯地となっている旧山砲隊兵舎の一部で、実際に使用できたのは一棟のみ、そのほか小使室・倉庫・便所だけであった。

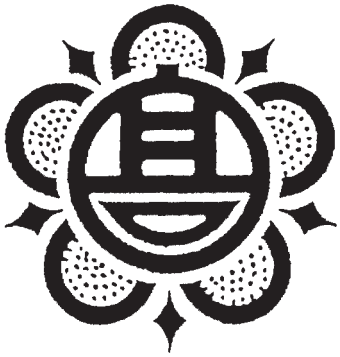


図１４－６　高等学校校章

1948年４月には、学校教育法の施行により全国的に新制高等学校制度が実施された。これに伴い、本校でも、新制中学校の上に新制高等学校が併設されることになった。翌1949年、金沢大学の創立により校名を金沢大学金沢高等師範学校附属高等学校・附属中学校として新たに出発し、1950年から新制中学の入学募集を停止した。次いで、1952年、金沢高等師範学校が閉校するに及び、校名をさらに金沢大学教育学部付属高等学校と改め、現在に至っている。なお、「付属」の文字は、この時から1986年度まで用いられ、1987年以降、「附属」が使われている。校地も1950（昭和25）年、現在の位置、つまり旧騎兵第九連隊跡地に移された。同年勃発した朝鮮戦争を背景として警察予備隊が発足し、旧山砲隊校地がその駐屯地となったからである。

このような制度の変化の中で、文字どおり「無から有を生み出す」思いで学校づくりが行われた。その理想とするところは創設時の主事（後の校長）小池喜雄の「昭和の松下村塾たれ」であった。当時の生徒は、空瓶や空缶、その他がらくたを集めては実験装置を作った。学校の放送設備も「電通班」に属していた生徒の手によって設置された。自治会は学校創設の年の５月、新憲法施行日に三小牛（みつこうじ）で発会し、手作りの文化祭や研究発表会が催された。しかし、１学年が40人程度から140人に増え、高師附属中が閉鎖され高校の３年

間のみの在籍者が増えてくる中で、この「良き校風」が薄れていく焦りを持った者も少なくなかった。その現れが1952（昭和27）年からのファイアストームの開催であり、1953年に起こった「草創期に戻れ」をスローガンとする「附高ルネッサンス推進民主化同盟の発足」であった。本校の初期の卒業生は毎年のように同期会を開き、近況報告の小冊子を作成している。当時の高校時代をそれぞれが大切にしている証左であろう。

写真１４－２５　旧木造校舎（1956年）

1958年から校舎の全面新築が始まった。旧兵舎を用いた木造校舎では施設・設備の整備には限界があったからである。まず、特別教室が1961年に竣工、続いて1962年に普通教室・管理棟、そして武道場1963年、体育館1965年、プール1966年と次々と竣工した。その後の大幅な改築は、1984年の窓枠アルミサッシ化、1995（平成７）年のテニスコート全天候化、正門の改築である。

附属高校の沿革の中で、今一つ記しておかなければいけないことがある。1986年に起こったクラブハウスの全焼である。クラブハウスは、旧軍隊兵舎を改造したもので、1964年以来、各クラブの部室や生徒会室として使用されてきたものである。原因は確定されていないが、消防は「漏電の可能性が濃厚」であるとしている。

なお、附属高校の創立以来50年の歴史は1998年６月『附高五十年』の形でまとめられた。

（2）教育研究

高校教育研究協議会と『高校教育研究』

附属高校は創立以来、膨大な研究を蓄積してきた。その成果を対外的に公にする最も重要な役割を担ってきたものが、附属高校主催の高校教育研究協議会と紀要『高校教育研究』である。高校教育研究協議会は1951年に第１回目が開催され、その成果をまとめる形で、『高校教育研究』が創刊されている。『高校教育研究』第１号、「発刊にあたって」では、次のように附属高校の研究に対する姿勢が示されている。

> 六・三教育の発足以来新教育研究はさかんに行われ、（中略）その多くは小・中学校の問題を取り上げていて、（中略）高校教育にページをさいているものはきわめて僅少である。これは高校教育に問題がないということを意味するのではない。むしろ高校教育の困難さに原因しているのである。教科内容の高度性・選択教科の煩雑さ・この年齢層が有する心理的な特

表１４－７　年表

西暦・月	事　　項
1947年 4月 （昭和22）	旧陸軍山砲隊跡を校舎として、第1回入学式、転入学式挙行（15日）。
47年 5月	官報で金沢高等師範学校に附属中学校（旧制）が付設されたことが公示される。（24日）
48年 4月	新学制実施に伴い金沢高等師範学校に附属高等学校（新制）・附属中学校（新制）付設する。
49年 6月	金沢大学金沢高等師範学校附属高等学校、同附属中学校と校名変更。
50年12月	警察予備隊設置に伴い、校舎を旧陸軍騎兵連隊跡に移転。
51年 6月	第1回高等教育研究協議会「教科書の在り方」開催。
52年 4月	金沢高等師範学校の閉校に伴い、金沢大学教育学部附属高等学校となる。
52年 5月	校旗樹立式。
52年 9月	金沢大学法文学部教育実習受け入れ開始。
52年10月	金沢大学理学部・薬学部教育実習受け入れ開始。
53年 1月	校歌制定（作詞：室生犀星　作曲：下総皖一）。
56年10月	体育館竣工。
58年 7月	テニスコート竣工。
58年 8月	名大附高戦開始。
61年 4月	特別教室棟竣工。
62年 4月	新校舎管理棟・教室棟竣工。
63年 1月	三八豪雪のため旧校舎倒壊。
63年 2月	教育学部養護教諭養成課程、教育実習受け入れ開始。
63年12月	武道場竣工。
66年 2月	新体育館竣工。
67年 7月	水泳プール竣工。
71年 9月	特別合同授業開始。
72年 1月	留学生受け入れ開始。
75年10月	茶室「有隣庵」完成。
77年10月	南庭（忘機園）完成。
86年 1月	クラブハウス全焼。
93年 9月	海外現地学習（北京）開始。
94年 4月	文部省研究開発校指定（平成4年度～6年度）。 研究主題「新教科：国際・文化科の導入を考慮した教育課程の研究」
95年 5月	夏服自由化。
96年 3月	正門改修。

（出典　1986年以前は『附高40年』　1987年以降は『金大附高新聞』）

殊性等から来る高校教育の複雑さ困難さは、我々に幾多の問題を投げかけている。ただ今日まで高校教育に包蔵されている幾多の問題に向かって取り組んでいこうとする人が比較的少なかったのではなかろうか。

わが校においては高校教育の正しい在り方を求めて日々の努力を重ねてきた。そして、今回我々の小さな歩みの跡を記録し、江湖の批判を仰ぎ御指導を得んがため機関誌「高校教育

研究」なる小誌を世に送ることとした。

このように、困難な高校教育研究に挑戦する姿勢は、創立以来一貫して変わっていない。附属高校の研究は、主に教科教育、教育課程、教育実習、生徒指導、その他学術的な研究などに大別できる。これまでの研究動向を概観してみると、初期には教材開発を中心とした教科研究が多い。これは手探りの中から戦後の新しい教育を担っていこうとする情熱がほとばしっていたからだろう。昭和30年代半ばからはそれに加えて、生徒指導やホームルーム運営など学校運営全般にわたる様々なテーマが取り上げられるようになった。徐々に成熟期を迎えたということかもしれない。昭和50年代からは、社会変化に伴う新しいうねりが教育現場にも押し寄せ、「チーム活動」や「国際・文化科」など様々な新しい試みの研究も多くなった。

附属高校では、時代の要請にこたえるべく様々な教育研究を行ってきたが、創立当初から最も重視してきたのは高度な学問的成果の上に立つ先導的学習指導の実践研究である。今後さらなる教育環境の激変で、教育研究の役割はますます重要になり、附属高校もその最先端の実践研究機関としての役割をこれまで以上に期待されていくであろう。

表１４－８　附属高校研究協議会テーマ一覧

回	開催年度	テーマ
1	(昭和26)1951年	高等学校教科書のあり方
2	52年	各教科の学習指導のあり方
3	53年	学習指導における困難点とその対策
4	54年	改訂教育課程の検討
5	55年	改訂教育課程における各科指導内容の研究
6	65年	学習指導について
7	68年	各教科における中学校と高校の関連性の検討
8	71年	教育課程の改訂に備えて
9	73年	チーム活動
10	81年	教育実習の指導と問題点
11	83年	改訂学習指導要領における教科指導
12	86年	現行指導要領の問題点と新指導要領に望むもの
13	88年	授業の設計と展開
14	90年	学習指導要領の実施に向けて
15	93年	地球サイズの教育
16	96年	“見えない学力”を育てる

全附連高校部会

全国国立大学附属学校連盟（全附連）高等学校部会は、横の連携を深め研究校としての責務をより積極的に果たしていくことを趣旨として、1954（昭和29）年に設立された全国の国立学校からなる組織で、幼稚園から高校、特殊教育などの学校種ごとの部会から構成される。研究会・協議会の開催、共通重要問題についての調査・研究、研究物の交換な

どの事業が行われており、全附連大会は最も重要な全附連の事業である。

全附連大会は1959年に第１回大会が東京大学附属高校で開催されて以来、首都圏とそれ以外の附属高校とが交互に会場となって毎年秋に開催されている。金大附属高校では1962年の第４回大会、1976年の第18回大会、1984年の第26回大会の３回の全国大会が開催された。

全附連大会は、総会や講演会などの全体の会が行われるほかに、教科ごとの分科会や「生活指導」「附属のあり方」などの分科会に分かれて研究発表や情報交換などが行われる。毎回四つほどの分科会が開設される。「生活指導分科会」は第１回大会から、「附属のあり方分科会」は第16回大会から毎回継続して開設されている。

元来、高校教育の理論的・実証的研究を互いに発表し合い、より良き教育の在り方を目指し続けるのが研究大会の目的だが、研究発表は多岐にわたり、授業の実践報告から個人的な学問的研究まで様々である。特に教育の変換期には先導的・試行的研究発表が多くなる。平成に入ってからここ数年は、時代を反映してかコンピュータの具体的利用方法や総合的学習などの先導的研究発表が目立つようになった。いずれにしても、高校教育研究としては、間違いなく全国一レベルの高い研究会の一つであると言ってよい。

地球サイズの教育　－「国際・文化科」の試み－

附属高校は、1992（平成４）年、文部省から「教育課程の基準改訂のための教育研究開発校」に指定された。「教育研究開発学校」とは、現行の学習指導要領によらず、将来の学習指導要領作りの指針となる実践研究を任務とするものである。附属高校の研究主題は「新教科〔国際・文化科〕の導入を考慮した教育課程の検討」であった。

“国際”という文字がつくと、外国語や地理・歴史の守備範囲のように思われがちだが、附属高校の「国際・文化科」はそれとは明らかに異なる。「国際・文化科」は従来の教科の間を埋める充填剤のようなもので、教科の枠を超えて文化・文明の在り方をより総合的に考えさせ、主体的問題関心を引き出す突破口となることを願って設置された教科である。「国際・文化科」は１年生を対象とする「国際・文化Ⅰ」と、２年生を対象とする「国際・文化Ⅱ」の２科目で構成される。「国際・文化Ⅰ」は「科学と生活」「伝統・文化と生活」「環境と生活」について、ディスカッション・グループ研究・ディベートの形で学習する科目である。「国際・文化Ⅱ」は「自己と世界の関わり」と「未来社会のデザイン」のいずれかについて、生徒それぞれが個別テーマを決めて約１万字の論文を執筆する科目である。

写真１４－２６「国際･文化科」留学生との交流授業

「国際・文化科」の実践は「地球サイズの教育」と題した第15回研究協議会で公開発表した。報告書も平成４年度・５年度・６年度の３ヵ年作成した。その成果は、金沢大学教官など学識経験者からなる運営指導委員の先生方からは高い評価を頂いた。生徒にもおおむね好評で、感想文でも「視野が広がった」「表現力がついた」などの意見も多い。

地球サイズの教育を目指した「国際・文化科」は身近な問題から世界的な問題まで、生徒一人一人が自分なりの意見を持てるようにするのが目標である。主体性の欠如が問題視される昨今の教育事情の中で、この試みは一つの解決方法を示唆しているといえよう。

情報教育を目指して

学習におけるコンピュータ活用の研究は、1989（平成元）年より始まった。この年、シミュレーションによる化学の学習について石川県教育センターとの共同での実践研究を行った。1990年にはコンピュータ・ルームが設置され、英語の文法学習や家庭科における「合計特殊出生率」についての探求学習を実践し、報告した。コンピュータ・ルームは放課後開放し、国語科のレポート作成にも活用された。また、コンピュサーブに加入し海外とのパソコン通信による文通が可能となり、1992年には海外との文通を英語の授業や特設教科「国際・文化科」の授業において利用した。1996年にはコンピュータを更新し、ネットワークに接続した。1997年、本校のホームページの公開とともに、１年次における特設科目「国際情報」の授業において、情報発進の課題として班ごとの紹介ホームページを作成させた。

（3）教育実習

教育実習の変遷

次の表からも明らかなように、教育実習校としての本校の特色は、開学以来金沢大学教育学部学生のための教育実習校であると同時に、金沢大学全学部学生の教育実習校として機能してきたところにある。

表１４－９　教育実習の変遷

学部名			期間	学部別累計	総累計
		金沢高等師範学校	（昭和23）1948～1951（昭和26）	415名	415名
金沢大学	教育学部	高校教員・特別教科	52～96	1,573名	6,274名
		中等科・中学校教員	64～96	320名	
		小学校教員	90～96	80名	
		総合科学	91～96	38名	
		養護教諭	64～96	300名	
	法文及び文・法・経済学部		52～96	2,175名	
	理学部		52～96	1,600名	
	薬学部		52～57、66、69、84	36名	
	工学部		52～60	152名	

教育実習の現状と課題

本校の教育実習は、現在以下に記すような形で年間３回実施されている。

表１４－１０　現行の教育実習

実施学期・月	期間	対象とする実習生
1学期　6月	2週間	教育学部小学校・中学校教員養成・総合科学課程学生 理学部生
	4週間	教育学部高校教員養成課程学生（保健体育）
2学期　10月	2週間	文・法・経済学部生
3学期　1月	4週間	教育学部特別別科生（養護教諭）

1997年度まで続いてきた以上のような本校における教育実習は、ここ数年来実施されてきた教育学部改組（高等学校教員養成課程の学校教育教員養成課程への改組や、総合科学課程の人間環境課程への改組など）の動きに連動して、大きな変革期にさしかかっている。具体的には、本校が実習生として受け入れる教育学部学生の再検討が早急の問題となっている。本校では高等学校教員養成のための主免実習を継続しながら、中学校教員養成のための主免実習などをも実施できる体制を整えていきたいと考えている。そのためには、教育学部から要請のあった1999年度からの教育実習計画の大幅な変更（６月実施の教育実習を９月実施に変更する）を実現しなければならない。また、その変更に伴って、当然予想される他学部学生対象の教育実習計画の見直しが必要となる。教育学部とより綿密な連絡を取り合い、学部学生の教育実習と本校が開学以来実績を残してきた他学部学生の教育実習との調和を保ちつつ、これまで以上に充実した教育実習活動が展開できる態勢づくりをしていかなければならない。

（４）幅広い教育・体験に基づく教育

附属高校の教育の特徴は、単なる教科の力だけではなく、より幅広く、より専門性が高い教育、実際の行動と体験に基づく教育を目指してきた点にある。教育研究のところで紹介した総合教科「国際・文化科」の実践もその一つであるが、そのほかに以下のような教育活動を行ってきた。

現地学習

宿泊を伴う行事が多いのが、附属高校の特徴である。それらを附属高校では「現地学習」と呼んでいる。物見遊山的旅行ではなく、事前研究をし、現地で見聞を広め深めるという学習的要素を重視しているからである。この「現地学習」という形が定着したのは、1966（昭和41）年ころからである。その一つが「大和現地学習」で、国語科・社会科のほか、健歩的要素も含めて体育科が中心となって始まった２泊３日または３泊４日の行事である。のち運営主体が学年になり、班別自主活動が導入されるなど若干の変容をしつつ

現在もなお継続している行事である。今一つは「能登野外実習」である。１泊２日の地学・生物・地理に関する野外実習で、1964年に始まり1975年まで続いた行事である。

いわゆる修学旅行も、行き先を北海道から東北方面へ変更した1968年から「現地学習」的性格を強めた。修学旅行は「昭和の奥の細道探訪」とも称され、その事前学習の成果は毎年『みちのく』という冊子にまとめられた。

この修学旅行に代わって、1994（平成６）年から「海外現地学習」が始まった。異文化を体験し、翻って日本人の置かれた環境を再認識し、さらに生徒が自己の将来を見据える契機にしようというのがその目的である。目的地は中国・北京であったが、1998年からはオーストラリア・シドニーとなった。

特別合同授業

特別合同授業は、1971年から始まった。年４回程度、各界で活躍中の講師を迎えて全校生徒に対して講演を頂くという企画である。それ以前にも年１回程度の文化講演会を催してきたが、それを更に有機的に構成しようとして始まったものである。教科書教材の拡大と深まりを期待する、教科間の間隙を埋める、高校教育と大学教育の接点を探り専門教育の準備をする、大学進学のための進路指導、専門的学問水準の紹介などがねらいである。

1997年現在までに98名の講師を迎えた。講演内容は多岐にわたる。主な講師を挙げれば、作家の大江健三郎、評論家の山本七平、演出家の浅利慶太らである。講演内容は毎年活字化し、『特別合同授業の記録』という冊子にしている。なお、特別合同授業は保護者にも公開されている。

チーム活動

1973年度から実施された学習指導要領で、「必修クラブ活動」を週１時間、卒業までに３単位取得することが必修となった。附属高校ではこれに先んじて「特別活動の在り方」を研究課題として、課外活動、ホームルーム活動、生徒会活動の在り方を研究し、それを踏まえて1973年度より「必修クラブ活動」を教育現場としてより改良した形の「チーム活動」を始めた。生徒をクラス・学年の枠を超えてチーム編成し、一人一人が種々のことを体験でき、教師にとっても負担にならず生徒とともに楽しく中に入って参加できる活動をしようというものである。初年度の共通テーマは「日本を識り世界を識ろう」で、具体的には「コンピュータの基礎と応用」「能の世界」「世界の料理」「茶の味・茶の心」などを内容とする「チーム活動」が実践された。その後チーム数も増加し、1977年には19チームが編成され、内容も生徒の意見を入れて「犀川いかだアドベンチャー」や「六人乗り自転車を作ろう」というユニークな活動も生まれた。しかし、次第に生徒と教師との意識のかい離も生まれ、1978年から「チーム活動」は廃止となり、「必修クラブ活動」は放課後の部活動で代行されることとなった。

自叙伝

「自叙伝」は高校一年生時の夏休みにすべての生徒に課される国語科の作文課題である。原稿用紙30枚以上の条件があり、1949（昭和24）年から現在に至るまで連綿と受け継がれている。高校へ入学して３ヵ月、「自叙伝」の執筆は生徒にとって自らを振り返る良い機会となり、また原稿用紙30枚以上の作文は、生徒の文章力向上にも役立っている。なお、この「自叙伝」は学校内で20年間保管され、卒業20周年同期会の席上で返還される。

様々な自主ゼミ

附属高校では生徒のより専門的な知的要求にこたえるべく、様々な自主ゼミが開設されてきた。希望生徒とチューターとなる教官による自主的な勉強会である。その最も伝統的なものが「数学自主ゼミ」である。始まったのは1967年、数学の専門書を読もうというのが内容である。最初に使ったテキストは正田健次郎の『代数学提要』、最も長く使用したテキストはブルバキ数学原論の『集合論１』である。そのほか、「日本史特ゼミ」と称した大学教養レベルの日本史テキストの輪読会や、「古典を読もう」という形での『伊勢物語』『竹取物語』『大鏡』の輪読会なども行われてきた。

（５）学校行事と学校生活

附属高校は創立以来、生徒会行事が盛んである。その特徴は行事の企画・運営から予算・決算に至るまで生徒自身の手によってなされ、教官がほとんど介入しないところにある。以下、伝統的生徒会行事及び部活動などについて紹介したい。

歌舞伎

歌舞伎上演は1963（昭和38）年に始まる。当初は予餞会で上演され、クラス催物であ

写真１４－２７　歌舞伎（青砥稿花紅彩画　1997年11月）

ったが、のち２年生による学年催物となる。1980年からは一般の高校の文化祭に当たる開校記念祭で上演されるようになった。演目は『勧進帳』や『仮名手本忠臣蔵』などである。衣装を舞台衣装店から借りる本格的なものであるが、歌舞伎を演ずるのみならず、演出、大道具・小道具、メイク、着付けに至るまで生徒自身によって運営される。昨今では三味線を演奏したり、義太夫を唸ることもある。生徒自身による質の高い文化的行事である。

名大附高戦

名大附高戦は、1958（昭和33）年から始まった名古屋大学教育学部附属高等学校とのスポーツ定期戦である。種目はテニス、バレーボール、バドミントン、卓球、バスケット、サッカーで、金沢と名古屋で１年おきに、会場を交替して夏休みに開催された。２度中断されることがあったが開催回数14回を数え、1977年まで行われた。

ファイアストーム

ファイアストームは第四高等学校の伝統を引き継ぐという形で1952年に始まった。名大附高戦が開始されてからはその壮行会的性格も持ち合わせた。寮歌を高歌放吟、時には十一屋まで練り歩くという蛮カラ風のものであった。1978年からは「火の祭典」と名称を変え、うたわれる歌も歌謡曲に変わった。1992（平成４）年以降は行われていないが、創立50周年記念行事の一つとして、1997年11月卒業生によるファイアストームが催された。

運動会

附属高校の運動会は、県下の多くの高校で行われている体育記録会と趣が異なり、伝統的な「楽しむ運動会」である。その中でも特にユニークなものとして仮装による入場行進がある。それは単に仮装するだけでなく、その時々の流行や学校生活の風刺などを演ずるというものであった。競技よりもこの入場行進に力が入れられたこともあり、入場行進に最大２時間もかかったこともあった。応援披露も運動会の目玉になっている。毎年、先輩から後輩に受け継がれてきた「臥竜屈（がりゅうくつ）」「天地乾坤（てんちけんこん）」「正調乱れ髪」と命名された演技を、３年生有志による応援団が披露する。極めて勇壮なものである。

夏服自由化

夏服自由化は1995年に実施された。それは1988年ごろから始まった生徒の要求によるものである。「夏服が動きにくくて非機能的であること」に加えて、本音として「夏服が可愛くないこと」が理由であった。石川県下の全日制普通科の高校で制服を自由としているのは附属高校だけである。それは「自由な校風」と「生徒と教官の信頼関係」の象徴である。

部活動

附属高校創立以来、当初の20年間、部活動はかなりの成果を挙げていた。その最たるものがサッカー部の活躍である。石川県サッカー選手権大会には1951年から1954年・1957年・1958年・1962年と優勝している。そのうち1952年と1953年には全国大会にも出場した。国体には1952年から1954年まで３年連続出場している。バスケットボール部は1969年に黄金期を迎えた。この年、石川県バスケットボール選手権大会で初優勝し、全国大会出場を果たした。このほか、馬術部が1952年と1956年に石川県体育大会で個人優勝、1952年と1955年に国体出場している。テニス部は1952年に個人で国体ベスト８に入り、1959年に個人で国体に出場、1964年・1965年には石川県軟式庭球選手権に団体優勝した。1966年にもダブルスで同大会に優勝している。

後半30年は、運動部よりも文化部の活躍が目覚ましい。その一つが演劇部である。演劇部は1972年・1974年・1975年・1979年と中部大会出場を果たした。囲碁部・将棋部の活躍も著しい。囲碁部では石川県大会で団体戦通算12回優勝し、女子も４回優勝した。全国大会では男子が1992年にベスト16、女子は1993年にベスト8、1995年にベスト４に入賞している。将棋部では、1992年に団体で全国大会出場、ベスト８の好成績を得、女子個人は1996年見事全国優勝を果たした。

ここ数年は、運動部でも全国大会出場者が相次いでいる。1994年・1995年には全日本高等学校ボウリング選手権大会に女子個人が出場、女子テニス部が個人で1995年に全国総体出場２回戦進出、男子陸上100mが1996年・1997年に国体出場、1997年に全国総体出場を果たした。

5　附属養護学校

（1）沿革

図１４－７　養護学校校章

附属小学校の特殊学級創設に至る経過及び特殊学級時代（1949～1963年）

1949（昭和24）年５月10日、金沢大学石川師範学校附属小学校の一隅に特殊学級が創設された。戦後の食糧難と物不足のこの時期、全国附属学校でははじめての学級設置であった。

その設置は当時の附属小学校校長澤田幸平教授の強い教育信念に基づいた尽力によるところが大きかった。初代教頭（現在で言う副校長）荒間八郎は『附属養護学校20年誌』で、

「国立病院の精神科医西谷三四郎先生、四高松本金寿先生、北陸学院のウイーン先生の両教育心理学者、それに実践家の第一人者である滋賀県立近江学園の田村一二先生などの強力な指導助言者を得られたというものの何分新しい分野の開拓でもあり、並々ならぬ努力によってはじめて、今日のこの教育の確固たる基礎が築かれたものといえましょう。」と述べている。１学級、教官１名、児童生徒３名による発足であった。

特殊学級時代の15年の間に、この教育の基礎となる組織がほとんどつくられている。例えば「金沢手をつなぐ親の会」（1954年）や「石川県特殊教育研究会」（1958年）及び「北陸三県特殊教育研究協議会」（1960年：後の東海北陸地区特殊教育連絡協議会）がある。また、本校育友会・母親学級（1954年）などもこの時期に活動が開始された。

附属養護学校の発足・高等部新設から創立10周年まで（1964～1973年）

特殊学級を前身として1964（昭和39）年４月、広坂通り88番地において県下初の精神薄弱養護学校として開校した（全国附属学校では３番目）。児童生徒は小学部・中学部併せて６学級73名、教職員は校長以下15名が配置された。澤田教授が初代校長、荒間が初代教頭となった。この期間は、校歌や校章の制定、教育目標・教育課程の制定、スクールバスの運行開始、校舎の建設、高等部の新設、学校給食の充実、木曽坂生活訓練の開始など教育の条件整備と施設設備の拡充がなされた時期であった。中でも、1967年に新校舎が竣工したことにより、広坂の地から現在地（金沢市東兼六町２－10　校地面積は4,192m^2）に移転し、高等部が新設されたことは特筆すべきことである。この時の高等部入学生は11名であった。

1969年には大学の職員寮を譲り受けて宿泊生活訓練施設（木曽坂寮）が開設された。

写真１４－２８　校舎全景

今の「すずかけの家」の前身に当たるもので、10～12名が５泊６日で共同生活を行った。

1973年11月には創立10周年記念式典と記念表現会が盛大に行われた。現在、校舎と運動場の間にあるすずかけの木はその時植樹されたものである。

義務制の前後と教育目標の見直し（1974～1987年）

1979年養護学校義務制を目前にして学校は大きく変わる。障害の重度化・多様化の中でいち早くことばの治療教室（1970年）が設けられ、「養護・訓練の指導」（1973年）についての研究発表会を持った。そして、障害の重い子らに対応するため小学部重度クラス（1976年）や中学部に年長自閉児の相談室（1978年）を開設した。

このようにして個に焦点を当てた学習体制が整う一方で、集団の渦の中でダイナミックな活動を展開して、教育効果を挙げようとする集団学習が盛んに行われた。部ごとの集団学習として小学部「朝の会」、中学部「ゲーム学習」、高等部「挑戦学習」がそれである。また中学部・高等部合同の「鼓笛隊」や全学部による「全校集会」も集団学習の大きな柱として位置付いた。

1987年、それまでの「社会適応」から、その子らしさを大切にし「一人一人の全面発達と自己実現」を目指すという教育目標の大幅な改訂を行った。あわせて、今までの実践を体系付けた新しい教育課程を編成した。また、入学選考の方法について選抜から抽選に変えた（1984年）ことも特筆すべきことである。このように障害の重い子らにも対応できる学校づくりや開かれた学校づくりが進められた。

1983年５月には創立20周年記念式典が行われ、記念植樹として中庭に白梅が植えられた。この期間は、特殊教育の内容や指導法の充実が図られた時期と言えよう。

創立30周年事業の前後（1988年～現在）

この時期、陸上部（1988年）やトランポリン教室（1989年）などの課外活動が定着し、対外的にも、一般の競技会に参加したり資格取得テストに挑戦したりしている。1991（平成３）年、身体障害者スポーツ大会（ほほえみの石川大会）では開会式の集団演技に参加した。

障害児教育の広がりと充実の中、1993年11月には、30周年記念式典が盛大に行われた。校旗の樹立、校章に描かれている柏の樹の記念植樹、卒業生を交えた記念パーティが行われた。また記録ビデオ「瞳かがやく子どもたち」と記念誌を作成した。

施設設備面ではレーザーカラオケ（1988年）やコンピュータルーム（1996年３月）がいち早く設置された。一方で、老朽化した施設の改修や修理も行われた。1996年４月には大学テニスコート及びプール跡地が本校に編入され、校地は一段と広くなった。11月に待望の日常生活訓練施設「すずかけの家」が完成した。

1997年11月、全国特殊教育連盟全国大会が金沢の地で開催され、全体会及び分科会で本校の研究成果を全国に向け発表した。また全体会のアトラクションとして、全校児童生

徒が集団演技「樹のまわりで」を披露し、好評であった。

1997（平成９）年４月現在、児童生徒61名、校長以下教官32名、事務職７名である。

表１４－１１　年表

西暦・月	事　　項
1949年 5月 （昭和24）	全国初の国立学校特殊学級を開設。 金沢大学石川師範学校付属小学校（昭和26年から金沢大学教育学部付属小学校）特殊学級。
50年12月	児童生徒数の増加及び新校舎建設のため教室を旧白梅寮（広坂）に移動。
52年 3月	第1回卒業式挙行。
53年 6月	専用運動場完成。
54年 5月	児童生徒数増（24名）により白梅寮内より一室を併せ、遊戯室とする。 「精神薄弱児教育」を文部省に提出。
59年 9月	独立の木造校舎（元 付属幼稚園の地）に移動。
60年11月	体育館完成により父母の会より舞台幕一式寄贈される。
61年 6月	映画「育ちゆく子ら」完成。
62年 7月	教育相談所開設。
64年 4月	金沢大学教育学部付属養護学校として発足。
64年 5月	育友会発足。
64年11月	校歌制定、開校記念式挙行。
67年 4月	現校舎落成。
67年 6月	高等部新設。
67年10月	スクールバス初運行。
68年 4月	映画「春を待つ子ら」完成。
69年 4月	宿泊訓練所開所（木曽坂寮）。
69年 9月	校舎増築（小学部・中学部棟）完成。
70年 4月	言語治療教室開設。
71年 8月	木曽坂生活訓練所、本校に移管（昭和58年まで）。
73年11月	創立10周年記念式典挙行。
73年12月	校庭横に児童用プール完成。
76年 4月	小学部重度クラス増設のため4クラス編成とする（昭和54年度まで）。
78年 4月	年長自閉症児の相談室開設（昭和58年3月まで）。
83年 5月	創立20周年記念式典挙行。
84年12月	1985年度入学者の選考に抽選制を採用。
85年 2月	映画「育ちあう子ら」完成。
87年 9月	体育館床改良工事完成。
88年 4月	「付属養護学校」から「附属養護学校」に記名変更。
93年11月	創立30周年記念式典挙行、校旗樹立、ビデオ「瞳かがやく子どもたち」と記念誌完成。
94年10月	第33回全国学校体育研究大会の特殊学校部会会場校。
96年 3月	コンピュータルーム設置。
96年11月	日常生活訓練施設「すずかけの家」完成。
97年11月	全特連石川大会の四つの分科会場。全体会において児童生徒によるアトラクションを発表。

（出典『創立三十周年記念誌』及び『学校沿革史』）

（2）教育研究

教育研究主題の変遷

本校の研究の歩みは特殊学級開設当初までさかのぼる。当時から独自のテーマを持って研究を進めており、附属小学校の研究発表会に合わせて毎年公開研究授業を行ってきた。

その後、独立し養護学校となってからも全国に先駆けてテーマを設定し、数多くの研究に取り組んできた。取り上げる研究のテーマは、教師の要望によるものや学校の状況から選ばれたものであるが、多くは、当時の社会情勢や学習指導要領の先導的試行として選ばれたテーマがほとんどであった。

養護学校となってからの本校の研究の歩みを大まかに振り返ってみると、養護学校の義務制を迎えた昭和50年代は、子どもの重度・重複・多様化に対応する個別学習と集団学習についての実践的な研究を進めながら指導の手だてを模索した。昭和60年代に入っては、

表１４－１２　教育研究一覧

年度	『研究主題』・「研究刊行物」等	年度	『研究主題』・「研究刊行物」等
1954（昭和29）	「精神薄弱児教育」	76	『生活科の指導について』 『職業・家庭科の指導について』
55	「特殊学級教育計画」	77	『低学年の集団づくりについて』
56	「いばらの中に」		『鼓笛隊の指導法と実践について』
57	「カリキュラム作成の一試案」		『職業適正と進路指導の関連について』
58			
59		78	『表現会のもち方』
60		79	『みんなが楽しめる合同学習』
61	「精神薄弱児の指導」など 記録映画「育ちゆく子ら」制作	80	『自閉症児の理解と指導』
		81	『障害の重度・重複化にともなう各領域での指導』
62			
63	「教育課程についての一考察」	82	『子どもと教師がともに育ちあう集団学習』
64			
65	『教育課程の構造』	83	『一人ひとりを生かす集団学習』
66	『教育課程』	84	『全校の児童・生徒が参加する集団学習』 記録映画「育ちあう子ら」制作
67	『教育評価』「発達の記録」など記録映画「春を待つ子ら」制作		
68	『精神薄弱教育における学習指導』	85	『子どもの感情を豊かにする表現活動』
69			
70	『生活に活きる知識・技能をめざす指導について』	86	『教育課程の編成』
		87	『教育課程の編成と指導法の研究』
71	『放送教育』	88	『発達と障害に応じた指導』
72	『生活に活きる技能・態度の指導について』	89	『発達と障害に応じた指導』
		90	『発達と障害に応じた指導』
73	『養護・訓練の指導』	91	『発達と障害に応じた指導』
74	『生活の用具の学習における教材・教具の研究』 『教育課程の構造』	92	『発達と障害に応じた指導』
		93	記録ビデオ「瞳かがやく子どもたち」制作
75	『教育課程の編成に関する研究』	94	『豊かな心と生活をめざして』

改訂された本校の教育目標の中にも見られるように、“その子らしく精一杯生きる力を育てることを目指す”という一人一人の子どもの実態に合わせた「自己実現」の方向を探る研究内容が取り上げられてきている。その流れを受けて、近年は「豊かな心と生活」をテーマとして、自然やもの・人や社会と子どもたちのかかわり合いに視点をおいて研究実践が行われている。教育課程の編成も適宜行われ、養護学校となって以来３回改訂し、最近では1987年度に発表している。

教育研究の取り組み体制

学校全体として一つの研究テーマを決め、小中高別に分かれてそれぞれの部で話し合いを進め研究実践を行うことが多い。日常的には毎週研究日を設けて、テーマに沿って話し合いや実践を行い、それらと並行して代表者による研究部会で集約・協議し、発表会の運営などを話し合う。例外的に全校の児童・生徒で行う集団学習「全校集会」の在り方を探った研究実践では、小中高の全教官を縦割りにして行ったこともある。

また、1988年度からの５年間は小中高の全教官が５～６の研究グループに分かれて研究を進めた。各教官が関心を持った課題や分野を取り上げてグループを作り、教官一人一人が研究の主人公となって日常的に活発に研究活動を行い、研究発表会ではそれぞれのグループによる分科会を持った。

教育研究発表会開催時期の変遷

養護学校となってからの教育研究会は当初を除いて主に10月に行ってきた。しかし、年度単位でテーマを決めて研究を行うことが多く、年度の当初から研究を始めて発表会を迎えるにはその実践期間があまりに短いこと、また近年の交通状況が大幅に改善され、冬場の発表会開催にも支障が少なくなったことなどの理由によって、1983年度から教育研究発表会の時期を２月に移し現在に至っている。

（３）教育実習

本校での教育実習の始まりは、金沢大学教育学部附属小学校特殊学級時代の1956（昭和31）年である。この年の11月に２週間の教育実習を実施した。1964年に金沢大学教育学部附属養護学校として発足して以来、今日に至るまで学部学生の教育実習の場としてその役割を遂行してきている。

発足当時から現在まで継続して実施している実習は、養護教員養成課程（現在の養護教諭特別別科）の教育実習である。当時の実習形態の記録を見ると、学生を二つのグループに分けて、それぞれ１週間ずつ、計２週間にわたり実習を実施した。この形態は1975年まで続いた。1976年からは他の附属学校や市内の協力校へ学生を分散して配属するシステムになり、本校へは３人の学生が配属されることになった。実習の時期は１月である。

そして実習の期間も４週間になった。この形態で現在も継続している。また、1967年からは養護学校教員養成課程の教育実習が始まった。実習の時期は６月、期間は２週間である。

写真１４－２９　教育実習風景

1973年に言語障害児教育教員養成課程が新設された。1976年から本課程の学生も養護学校教員養成課程の学生とともに本校に教育実習に来ることになった。本課程の学生は言語指導実習も必修単位科目であり、この年から実施された。実習期間は10月～12月の毎週特定曜日の１時限（100分）である。３～４人の学生が１グループになり、対象児に発音指導を中心とした指導を行っている。

また、1974年からは観察参加実習も始まった。対象学生は２年生である。これは、学生が実際の児童生徒を理解するための一つの機会であると同時に教育実習の前段階としての位置付けである。実習期間は10月～12月の毎週金曜日の１時限（100分）である。

1975年に特殊教育特別専攻科が設置された。それに伴い教育実習が実施されることになった。実習の時期は１月である。期間は２週間である。この２週間は養護教諭特別別科の学生の教育実習も並行して行われている。さらに特殊教育特別専攻科では言語指導実習も必修単位の科目であり、学部学生と同じ時期に実習を行っている。

1964年の養護学校発足以来1997年度までの33年間に本校で教育実習を行った学生数は延べ3,000名余りになる。

終わりに現在の教育実習の状況について述べる。1997年度現在、本校で実施された教育実習は表１４－１３のとおりである。教育実習の日数は延べ日数にして80日余りである。年間授業日数を40週（240日）とすれば３日に１日の割合で教育実習が実施されていることになる。また1997年度に教育実習を行った学生数は延べ140名余りである。

参加した教生からは「ことばのない子どもたちとどうかかわっていったらよいか分から

表１４－１３　本校の教育実習（1997年）

教育実習の種類	対象課程	人数	実習期間
Ⅶ期教育実習	養護学校教員養成課程　4年	13人	6月2日～13日
	言語障害児教育教員養成課程　4年	20人	
言語指導実習	言語障害児教育教員養成課程　4年	20人	10月～12月の毎週
	特殊教育特別専攻科	16人	特定の曜日
観察・参加	聴覚障害児教育コース　2年	13人	10月～12月の毎週
	知的障害児教育コース　2年	17人	金曜日の1時限
	言語障害児教育コース　2年	12人	
特別専攻科教育実習	特殊教育特別専攻科	16人	1月12日～23日
特別別科教育実習	養護教諭特別別科	3人	1月12日～2月7日

なかったけれど、そのうち、生徒の表情やしぐさから意思が分かるようになった。お互い通じ合った時の喜びは格別だった。」「教科書がなくて、何をどのように教えたらよいか分からず非常に悩んだ。だけど、子どもたちが喜んでくれそうな教材で学習できた時は、ホッとした。教育の原点を知らされたように感じた。」などの感想が常に語られる。

養護学校における教育実習は、障害児と直接触れ合うことにより、障害のことやかかわり方について体験的に理解できるという視点から、今後ますますその意義が大きくなっていくと思われる。現に1998年度から教員を目指す学生には校種を問わず、障害者・高齢者の介護等体験を重視した「介護等体験」が義務付けられることになっており、更に多くの学生が来校するものと思われる。限られた期間の中で教育実習生や学生がより多くのことを学べるように、参加内容や方法について常に検討していきたい。

（4）学校生活・学校行事

学校生活

児童生徒は登校すると、運動着に着替えをする。着替えは、小学部にとっては特に大切な自立に向けての学習の場である。その後、各学級で朝の会が始まる。学級担任は、子どもたちに今日の学習や予定について確認をする一方、家からの連絡帳にも目を通す。その後授業が始まる。小学部の授業は、できるだけゆったりと日々が繰り返されるように横帯状の週時間割で構成されている。中学部や高等部では、学級担任による授業を大切にしながらも教科担任制による授業が多く行われている。

授業形態について言えば、児童生徒と教師がマンツーマンで行う個別授業から小グループによる授業、学部全体で取り組む授業、二つの学部が合同で行う「鼓笛隊」の授業や生徒会活動、全校集団で行う全校集会などがある。

児童生徒は、ほとんどが市内から通っている。わずかながら近郊の郡市から通ってくる子もいる。通学方法は様々で、保護者の送迎、スクールバスを利用している子、一人で公共交通機関を利用している子などである。一般的に言えば、通学に当たっては小学部から可能な限り公共交通機関などによる一人通学ができるようにと、本人・保護者・学級担任が連携をとりながら指導している。

主な全校的行事の活動

現在、全校挙げて取り組んでいる活動には、遠足、合宿、修学旅行、運動会、表現会、バザー、もちつき大会などいろいろあるが、中でも運動会、表現会、バザーは学校だけでなく、親、卒業生、学生、支援していただいている方々などの参加、協力により、大きな活動となっている。

運動会はかつて1956（昭和31）年から1972年まで市内の施設や特殊学級が集まり、合同で行った時代もある。以後「春の運動会」「秋の体育祭」時代を経て、1983年からは年

１度秋に行うようになった。1996（平成８）年には大学のテニスコート跡地が校地に編入され、名実ともに大運動会を繰り広げることができるようになった。

表現会は子どもたちの成長をみんなで確かめ合う場となっている。小学生のころ、一言も言えなかった子が中学部では伸びやかに表現し、高等部になるとみんなで劇に取り組み演技するまでになるという変容は、全体の喜びでもある。この表現会につながる活動として子ども表現会（1957年ごろ）、招待会（1964年ごろ）があり、北陸鉄道バスの運転手や車掌さんを招待していた。近年では教育実習生をはじめ、母親や父親もステージに立ち、見事なパフォーマンスを見せている。この表現活動は特殊学級時代から盛んで大きな行事単元として各学部は力点を置き、子どもたちもこの取り組み過程を通して顕著な変容を見せている。

写真１４－３０　表現会・小学部劇「笑点」

バザーの発端は1972年に始まった高等部の生活の仕方の教育活動にある。この活動に育友会が手作り品コーナーを出店したり、中学部が喫茶店を分担するようになったのは1991年からである。

このほか、遠足、もちつき大会は全校行事として、修学旅行、合宿は各学部行事として取り組んでいる。

写真１４－３１　全校集会でのゲーム活動

宿泊生活訓練

本校では特殊学級時代から宿泊生活訓練を大切に考え、実施してきた。養護学校になり校舎を建設するに当たって他校には見られない大きな和室を取り入れたのもその考えからである。1969年度から、元は大学の職員寮であった木曽寮（木曽坂寮）を利用しての宿泊生活訓練が継続的に行われるようになった。しかし、木曽坂寮が1984年度に施設の老朽化を理由に解体されることになり、宿泊生活訓練は訓練というより年１回程度辰口共同研修センターを利用しての行事的なものとなった。以来、自前の宿泊施設の建設が待望されてきたのであるが、1996年11月に念願の日常生活訓練施設「すずかけの家」が完成し、本校の宿泊生活訓練も新たな時代を迎えることになった。

課外活動

学校での教育活動の一つの柱として課外活動が挙げられる。本校では1976年に本格的部活動としてソフトボール部が誕生した。このソフトボール部は他校との親善試合を行うなど活発な活動をしていたが、次第に部員の確保ができなくなり、1984年に消滅した。

ソフトボール部と交替するかのように一人の生徒が陸上競技の練習を放課後にするようになり、友達を巻き込むような形でトレーニングに励む生徒が増えていった。それで、1988年からは陸上部として対外的な試合にも参加するなど活発な活動をするようになり、今日に至っている。また1989年から親子で参加するトランポリン教室も行われるようになり、バッヂテストでも良い成績を残すなどの成果を挙げている。

卒業生の進路

1967年に高等部が新設される以前及びその後しばらくは、卒業生の進路といえば、就職（一般就労）するか在宅（家業従事、家事実習などを含む）かのどちらかであった。当時、在宅はまれでほとんどが就職であった。しかし、1975年ごろにはじめて通所の小規模作業所が作られて以来、就職は困難であるが自宅から通える・働ける場として、小規模作業所や授産施設（福祉就労）が次から次へと作られるようになってきたことにより、進路選択の幅が広がってきた。これは、1979年の義務制と相前後する児童生徒の重度化・多様化とは無縁ではない。最近は自宅から小規模作業所や授産施設に通う子がほとんどで、就職する子は数名というのが現状である。卒業生の中には自宅から離れ、グループホームや通勤寮に入って事業所や授産施設に通う子も見られるようになってきた。

このほか、最近では、もう少し作業能力をつけようとして能力開発校に進む子もいる。また、入所施設もあるが、卒業と同時に入ることはまれで、親亡き後に入るケースがよく見られるようになってきた。

広報誌『すずかけ』

本校の広報誌『すずかけ』の第１号は、1970（昭和45）年７月に育友会の機関紙として発行したのが最初であった。後に学校の広報誌になったが「すずかけ」という名前はそのまま残すことにした。はじめはガリ版印刷だったが、第４号からは活字印刷になり、また学期ごとの年３回発行だったのが前期後期の年２回発行になるなど、幾つかの節目を経て現在に至っている。右に、広報誌や日常生活訓練施設の名

学校の駐車場に２本のすずかけの木があります。本校の創立10周年を記念して昭和48年に植えられた木です。

春になると若い枝がぐんぐんのびて葉がいっぱいに茂ります。大きな葉は互い違いにつき秋になるとその真下に細長い柄のついた丸い果実が垂れ下がります。その姿には　お母さんの手　お父さんの手　先生の手のように　みんなの慈愛のこもった手が重なり合ってみえます。その下で風に揺れている子どものような可愛い果実を　明るい浅緑の透光がやさしく包んでいます。初冬になると葉は落ちますが　果実だけは残って自立していく子どものようで立派に生きていってほしいと願う私たちの思いが込められているに違いありません。

40数年も前　本校の前身である附属小学校の特殊学級の玄関の横にも　大きなすずかけの木が１本ありました。その木の下の小さな広場で　当時の28名の子どもたちが毎日朝礼をしていました。秋になって手まりのような実がいっぱい垂れ下がっている下で　先生は「この木の名前はすずかけというんだよ。見てごらん。こんなにかわいい実がたくさんなっているよ。」と上を向かせて背伸びの体操をしていたそうです。

本校が養護学校として独立して34年。その間にすばらしい伝統と校風ができあがっています。“風に学ぶ”という言葉があります。子どもたちがとりまく環境がよければ　その中に子どもたちがいるだけで学び合い育ちあっていくのではないでしょうか。本校の将来計画の中に“すずかけの並木道”を作ってその木の下で遊んだり　散歩したり絵本を読んで聞かせたりしたらいかがでしょうか。ロマンチックですてきですね。

（広報誌「すずかけ」No44,No61より抜粋）

図１４－８　「すずかけ」の名前の由来

称となっている「すずかけ」の由来について、参考として掲載する。

（5）その他

育友会活動

育友会の歩みは、本校が特殊学級として発足した1949（昭和24）年、また養護学校になった1964年以来、今日までの学校の歩みそのものと言っても過言ではない。この間、学校と家庭が一体となって子どものために考え、校内はもとより他校の保護者と“手をつなぐ親の会”（1954年）を結成したこと、“北陸三付養PTA研修会”（1986年）を作ったこと、また“福祉の勉強会”を通して実際に施設づくり（1984年）や作業所づくり（1987年）に結実したこと、学校の研究会に１分科会として参加したこと、父親部会を設立（1994年）したことなど、常に積極的に活動してきた。そして開かれた育友会活動を続ける中で子どもたちの在学中はもちろん、卒業後の生活についてもどう支援できるかを考えてきた。

そのほかにも、親同士の親睦・研修としてテーマを決めて研修会を行ったり、施設見学や忘年会を毎年実施したりしている。また、育友会夏まつりや12月のバザーには、学部を越えて、親同士で自前の手作り品を出品したり販売したり、準備から後片付けまで積極的に協力し合って取り組むなど、とても活発に行っている。２月の学校研究発表会の運営にも携わっている。

同窓会

本校では、毎年８月後半の日曜日に同窓会を行って卒業生同士の親睦を図ったり、互いの消息を確かめ合ったりしている。卒業生総数約280名の内、大体70～80名の参加で、昼食をはさんで自己紹介したり歌を歌ったりゲームをしたりしながら楽しい時を過ごしている。中にはこの場でゲームを出題するのを楽しみにしている人もいて、卒業生の多くはこの会に出るのを心待ちにしている。

兼友親子の集い

1987年度から毎月１回、日曜日に卒業生とその親の有志が学校に集まり「兼友親子の集い」を行っている。これは卒業後、卒業生同士、親同士の心のつながり、学校とのつながりを大切にして友達づくりの場、子どもの現在と将来を考える場にしていきたいとする親御さんの要望を受け、本校教官のうち有志がボランティ

写真１４－３２　兼友親子の集い

アとして参加し、親とともに運営に当たっている。活動内容は主にリトミック、コーラス、絵本の読み聞かせ、ダンス、ゲームであるが、卒業生にとっても体と心のリフレッシュの場となっているようである。年間の計画もハイキングに出掛けたり学校の表現会に出演したり、12月にパーティをしたりと、楽しい「集い」として定着してきたようである。

6　附属幼稚園

（1）沿革

教育学部附属幼稚園発足までの状況

本園創立は1887（明治20）年４月、石川県尋常師範学校附属幼稚園として、広坂通り１番１の地で50名の園児を入園させ、歴史の第一歩を踏み出した。1901年４月からは法制的に、石川県師範学校附属小学校付設の幼稚園として位置付けられることになった。1914（大正３）年には石川県女子師範学校附属幼稚園と名称を変え、大正期の自由保育の思潮も取り入れながら保育を展開している。「元気、規律の気象、志気の養成」の大切さを重んじ、幼児を自然な中で教育しようと努力している。1931（昭和６）年の満州事変以降戦時色も強くなり、しつけの努力項目の中には「兵隊さん有りがとう」「宮城の遥拝はりっぱに」などがあり、幼児教育もその影響を受けていたといえる。1947年、学校教育法が制定され、これまで学校体系から切り離されてきた幼稚園が、新たな統一的学校体系の中へ「学校」として編入された。1949年国立学校設置法の公布により、金沢大学石川師範学校附属幼稚園と改称され、園章を小学校とともに「かしわ葉」に制定した。現在の金沢大学教育学部附属幼稚園に切り換えられたのは、師範学校や青年師範学校が廃止され、金沢大学となった1951年４月１日である。

図１４－９　幼稚園園章

園舎の建築

1889年に広坂通り88番地の幼、小、中のキャンパスに移転してから、幼稚園はずっと、附属小学校の一隅、２教室を使って教育活動を行ってきた。だが、1948年４月児童数増加のため師範学校女子部職員室跡へ移転した。この移転を皮切りに頻繁に居を変え、1959年４月学級増が認められるまで、実に８ヵ所を転々としている。1932年に１学級に

減じたままであったが、27年ぶりに２学級編制として再出発できたわけである。旧石川師範女子部の改造工事ではあったが、1959年９月に遊戯室１、保育室２、職員室１、物置１が出来上がり移転した。小中学校とは別棟の幼稚園は、幅広い教育活動と研究活動の場となっていった。

写真１４－３３　旧広坂木造園舎

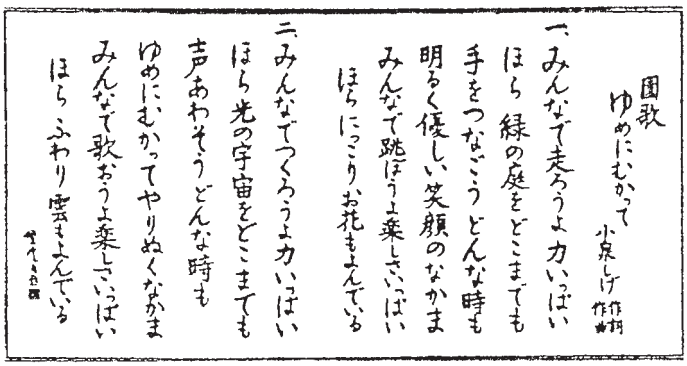
独立と設備の充実

1959（昭和34）年の学級増、1964年の文部省の第一期幼稚園教育振興計画の発表、さらに1966年、教頭制の導入により、本園の教育活動が一層充実したものとなってきた。石川県でも幼稚園の数は順調に伸び、そのような状況の中で、時代の要求する幼児教育に必要な改善策を打ち出さなければならなかった。これまでの附属小学校の庇護の下から独立する時が近付いていたのである。

1967年４月、幼稚園園舎建築の朗報がもたらされたが、広坂の敷地は、幼・小・中のキャンパスとしては非常に狭く敷地をどこにするか困難点が多かった。しかし、広坂以外に適地なしとの結論に至り、同年８月に幼稚園舎新営起工式を行い、翌年２月に新園舎が完成した。当時、国立大学附属幼稚園には２階に保育室を持っているところはなく、敷地狭隘の際のモデルとして注目された。幾多の曲折の末、附属小学校の理解と附属中学校の

写真１４－３４　旧広坂園舎

協力を得て、幼稚園独自の組織と経営が可能となり、幼稚園は完全に独立した。独立までの80余年は、附属小学校とともに歩み続けた幼稚園の育ちの歴史であった。


園歌
ゆめにむかって
小泉しげ作詞

一、みんなで走ろうよ力いっぱい
ほら緑の庭をどこまでも
手をつなごうどんな時も
明るく優しい笑顔のなかま
みんなで跳ぼうよ楽しさいっぱい
ほらにっこりお花もよんでいる

二、みんなでつくろうよ力いっぱい
ほら光の宇宙をどこまでも
声あわそうどんな時も
ゆめにむかってやりぬくなかま
みんなで歌おうよ楽しさいっぱい
ほらふわり風もよんでいる

作曲

図１４－１０　園歌「ゆめにむかって」制定（1986年）

その歴史の幕を閉じ、まず手がけたのは園舎周辺の環境整備であった。芝生の園庭、つつじとマリーゴールドの庭、前庭のアスファルトの舗装、飼育小屋の設営と整備は順々に進められた。また、教育計画の手直しも始まり、子どもたちの活動状態や将来構想を加味して遊戯室の拡張に取り掛かった。1977年５月31日には、これまでより115m²広い、259m²の遊戯室に拡張され、子どもたちはより活発に活動し、教育研究発表会参加者にかけていた迷惑も減少した。1974年４月から、学級補助としての非常勤講師採用が認められ、1976年４月には、養護教諭の非常勤講師も付けられ、幼児の健康管理や養護指導が効果的に行われるようになり、教育活動が一層充実したものとなってきた。

創立百周年

1987（昭和62）年４月、本園は創立百周年を迎えた。その記念事業の一環として『百年のあゆみ』と題し、百年誌を刊行している。園の百年史を後世に伝える碑誌として、小泉しげ前副園長の功績により編集された非常に貴重なものである。県下の幼児教育の普及、発展に貢献してきた尊い歩みは、これから本園が歩む道しるべとなることを確信している。

1987年５月15日

○創立百周年記念式典を挙行する。

○ブロンズ像「花のまわりで」を建立する（同窓会寄付）。

○園旗樹立式を挙行する。

写真１４－３５　ブロンズ像「花のまわりで」

新園舎移転と新しい幼稚園教育

幼稚園舎の特色　1995（平成７）年２学期から幼・小・中が高等学校のある平和町キャンパスに移転し、新たな環境での教育活動が始まった。幼稚園から高校までが同一キャンパス内にある環境を生か

し、幼稚園舎と小学校舎の接続部分にプランニングルームを設けている。施設共有化の試みは、幼・小の一貫教育の活動を推進する上で大いに役立っている。プランニングルームは、総合移転に伴う施設内共有化の試みであり、教師や子どもたちが一つの空間を自由にプランニングして、使用できるよう設置された空間である。新営に当たっては、小学校舎の面積として算出された経緯があり、幼児らが日常的に使うことができないのが残念である。だが、幼稚園舎にはゆとりのスペースがないので、体重測定や学年懇談会などの毎月の行事や研究発表会、PTA活動の場として大いに役立っている。５歳児保育室は、廊下との間仕切りをスライディング・ウォールとし、オープンスペースの機能を持たせることによって、より多目的に活用できるようになっている。また、園舎の周囲には庇付きのテラスがあり、降雨や積雪時でも活動できるようになっている。このようにオープンスペースや庇付きテラスによって、幼児の活動範囲が広くなり、天候に左右されずに生活できるようになった。小学校舎に面した南側の運動場では、これまで小学校と合同で行っていた運動会を、園独自の運動会として催すことができるようになったが、1968（昭和43）年に小学校から名実ともに独立をした後も、広坂キャンパス内にいる間は、運動会だけは小学校に付随し、一つの学年として参加していた。平和町キャンパスに移転してから、ようやく念願の幼稚園独自の運動会ができるようになったのである。南側の運動場、東側のなかよし広場、北側のアスレチック広場、前庭のふれあい広場に囲まれた園舎は、四季折々の草花や動植物に触れ合うことができるようになっている。このように園舎と調和のとれた園庭は、送迎時の親子の触れ合いや地域の子どもたちの遊び場ともなっている。

これからの幼稚園教育　新築移転により、これまで２階建てであった園舎が、平屋造りとなった。そのことにより、幼児たちはテラスごしにどの保育室にも自由に出入りし、運動場や園庭にも保育室から直接出ることができるようになっている。それぞれがクラスや学年の枠を超えて自由に交流し、伸びやかに園舎を駆け回っている。園舎の採光や色彩も柔らかく、温かな雰囲気の中で、一人一人が自分らしさを出しながら様々な環境とかかわって楽しんでいる。幼児たちの活動が広範囲に及ぶようになったり、３年保育３歳児が他学年の影響を受けて活動的になったりすることにより、教師間の連携を密にし、より多くの目で幼児たちの姿を見守る教育活動が営まれるようになってきた。今後もスペースフリー、ヒューマンフリー、タイムフリーの良さを生かした保育活動を推進していきたいと考えている。

写真１４－３６　平和町　新園舎

1992年に３歳児学級を開設し、５学級編制となってから３年目の新築移転は、これま

表１４－１４　年　表

西暦・月	事　　項
1949年 5月（昭和24）	金沢大学の発足に伴い、「金沢大学石川師範学校附属幼稚園」と改称され、園章を「かしわ葉」とする。
51年 4月	国立大学設置法の一部改正により、「金沢大学教育学部附属幼稚園」と改称される。
52年 6月	金沢大学教育学部学生の教育実習始まる。
52年 6月	第1回研究発表会を開催する（以後毎年開催）。
59年 4月	学級増が認められ、2年保育開始。4歳児16名、5歳児42名。4歳から進級時不足数の1年保育児を入園させる。
68年 2月	新園舎が完成し、新園舎での保育が始まる。
68年 3月	新園舎の竣工式を挙行する。
68年 4月	附属幼稚園が附属小学校から分離し独立する。
69年 2月	本年から新入園児の選考を幼稚園で行う（以後毎年続く）。
72年 5月	わかば会発足する（附属幼稚園を支援する任意団体）。
74年 4月	非常勤講師1名採用（学級補助として年間506時間）。
76年 4月	非常勤講師1名採用、計2名となる（養護教諭、年間420時間）。
77年 5月	遊戯室拡張工事完成する（144m²が259m²となる）。
80年 4月	石川県公立幼稚園教育研究会長園となり本部と事務局を兼ねる（以後現在まで続く）。
86年 1月	園歌「ゆめにむかって」を制定する。
87年 2月	百年誌を刊行する。
87年 5月	創立百周年記念式典を挙行する。ブロンズ像「花のまわりで」を建立する。 園旗樹立式を挙行する。
92年 4月	3歳児学級を開設する。 非常勤講師1名採用、計3名となる（3歳児学級補助として年間880時間）。
93年 4月	4歳児学級を増設する。
94年 4月	5歳児学級を増設する。
95年12月	園舎竣工・移転し、完成記念式典を挙行する。
96年 4月	養護教諭定員化となる。

（出典『百年のあゆみ』及び『幼稚園のしおり』）

での保育活動により一層の躍動感と充実感を与えるものとなっている。特に、３年保育３歳児にとっては、開放感あふれた保育室と園庭は魅力的な環境となっている。また、他学年との交流も自然体で行われることから、いろいろな情報や生活ぶりを学ぶことが多い。このような物的人的環境を通して、３歳児はより多くの刺激を受け、幼稚園という集団の中で自分づくりをしていく。３年保育３歳児がどのような環境において、どのような援助を必要とするのか。これらの究明がこれからの本園の教育課題ともいえる。

幼稚園舎と小学校舎がプランニングルームを境に続いていることで、交流活動がスムーズに行われるようなってきている。小学校低学年の「生活科」は言うに及ばず、総合学習や児童会活動を通して、全学年との交流が行われている。交流を通して教師間の中で、互いに幼児理解や児童理解が深まっている。これらの交流を通して、幼稚園生活の２年ある

いは３年間という期間の中で育ちをとらえるのではなく、小学校、中学校生活までの長い見通しの中で、一人一人の育ちを見守る必要性を感じている。今後も隣接している環境を生かし、小学校との交流を促進しながら、一貫教育の良さを保育活動に生かしていきたい。

（２）教育研究

教育研究活動は、幼稚園教育の望ましい在り方を常に追求し、教育界の思潮を受けながら先導的研究の場として、創造的に試みられている。1952（昭和27）年に第１回研究発表会を開催してから、毎年公開保育と研究発表を行い、県下の幼児教育の普及、発展に努めてきた。1998（平成10）年６月に、「自分らしさを出しながら生き合う生活」（サブテーマ“かかわり”の変化を通して）をテーマに第44回の研究発表会を開催し、これからの幼児教育の在り方を公開発表している。

写真１４－３７　研究発表会（1989年６月）

研究の歩み

幼・小が一体の1963年ころまでは、小学校の教育方針の中にあっての研究活動であった。小学校の主義主張を受けながら、幼稚園教育の独自性と特殊性を保つために、議論伯仲が長時間に及ぶことも珍しくなかったようである。小学校とともに歩んだこの時期は、幼稚園は小学校の教育内容を、小学校は幼稚園の教育内容を自然な姿で、お互いに理解し合えた時期でもあった。これまでの当園の研究の歩みを振り返ると、常に「幼児、一人一人を育てる」ということを究極に求めている。「一人一人を育てる」という大筋の中で、これまでの研究の推移を見ると、大きく三つに分けることができる。第１は、幼児の遊びを主として「領域」から見てきた時期である。1956年の幼稚園要領、1964年の改訂教育要領によって、領域は教科にあらずの考え方が明確にされた。それを受けて、幼児の活動を総合的な指導から切り込んで研究している。第２は、「人間の素地」として必要なものは何かを追求した時期である。1970年代の高度成長化に伴い、創造性ある人材を求める社会的背景もあって、創造する人間教育の最初の段階を考えての教育実践がなされている。第３は、幼児一人一人の心の有り様を大切にした保育の在り方を探る時期である。1989（平成元）年３月に幼稚園教育要領の全面改正がなされ、それを加味して「一人一人の内面」を探りながら、教育課程、指導計画を作成し、それぞれの幼児理解を深めた時期でもある。ここではこの三つの時期を研究概要の一覧で提示する。

表１４－１５　研究概要の一覧

「領域」からみて		「人間の素地」として		「一人一人の内面」からみて	
1956（昭和31）↓	・自然に関する保育の実際	71↓73	・創造性の指導	87↓90	・一人一人を生かす環境
58	・劇遊びの実際	76	・一人一人を育てる指導	91↓93	・幼児の生活に沿った教育課程の編成にあたって
59	・保育計画の検討	77	・感動や驚きの芽を育てる指導	94↓95	・幼児の生活に沿った指導計画の作成にむけて
60↓↓	・創造性を培う製作指導	78	・一人一人を育てる指導	96	・自分らしさを出しながら育ち合う生活
62	・造形活動をどのようにするか（基準表と指導計画刊行）	79	・ごっこ遊びの指導	97	・自分らしさを出しながら生き合う生活
63	・集団遊びのカリキュラム	80↓83	・感動や驚きの芽を育てる指導		
64	・体育的遊びの指導	85↓86	・取り組もうとする子ども		
65	・数量生活を取り扱って				
66↓	・図形生活の指導				
69↓70	・リズム遊びの指導				
74↓75	・言語活動の指導				
	・数量生活とその指導				

表１４－１６　免許取得者数

	幼稚園免許取得者数			実習生数	
年度	1級（名）	2級（名）	計	副専攻	養護実習
1988(昭和63)年度	33	41	74	0	1
89年度	34	30	64	0	1
90年度	50	17	67	0	1
91年度	37	16	53	5	1
92年度	13	18	31	4	1
93年度	39	8	47	6	1
94年度	22	2	24	3	1
95年度	21	6	27	2	1
96年度	39	6	45	2	1
97年度	35	8	43	4	1

（金沢大学教育学部調べ）

（3）教育実習

金沢大学教育学部には、幼稚園教員養成課程がないが、副専攻で取得している学生がいるので、毎年６月に２週間教育実習がなされている。また、養護教諭特別別科教育実習も３学期に1ヵ月間行われている。独立してからは、附属幼稚園の創設の柱となっている教育実習については、近年１級免許の取得割合が増えてはいるが、幼稚園免許取得者数に比して実習生が少なく、改善の方向で大学に働きかけている。ここ数年、教員採用率が低いこともあって、幼稚園や保育所などに就職を希望する学生もいる。幼稚園での教育実習生は自らの希望によることが多いので、幼児教育に対する関心も高く、子どもたちと一緒に遊んだり、それぞれの育ちを考えて教材作りをしたり、熱心な実習振りである。

（4）幼児の生活と行事

保育の変遷

1948（昭和23）年に出された保育要領の方針を受け、1951年11月に第一回の教育研究協議会が開催された。「楽しい幼児の経験」を大切にして、「目標に向かっていく場合、あくまでもその出発点となるのは子どもの興味や要求であり、その通路となるのは子どもの現実の生活である」との趣旨に基づいて保育が展開されている。

1956年、保育要領は「幼稚園教育要領」となり、「健康、社会、自然、言語、音楽リズ

表１４－１７　保育の概略

1951(昭和26)年11月	1959(昭和34)年 6月	1993(平成5)年10月
・登園　自由遊び　お片付け ・集い　ごあいさつ　幼児体操　先生との話し合い ・リズム遊び 楽器に合わせて先生と一緒に自由にリズム遊びをする。（鳩・汽車） ・休憩 秋の山の劇遊びの話し合い ・劇遊びをする 配役を相談して決める。身支度は何がよいか考えてする。 それぞれの場所について自分のすることを考えて楽しく劇遊びをする。 ・お片付け、降園	・登園　健康観察　自由遊び ・あつまり 朝のうた　話し合い 運動会の相談 ・おたまじゃくし、カエルになって動く。 ・運動会を始める。 カエルの体操、カエル跳び競走 ・休憩 言葉遊び（ゲロゲロなに） カエルのレコードをきく 曲に合わせてカエルの表現をする ・おすもう（ひっぱりっこ） ・家に帰るカエルのゲームをする。 ・帰りの準備、降園	・登園　健康観察 ・したい遊びをする 自分のしたい遊びを気の合う友達と好きな場所でする。 ・片付ける。 ・牛乳を飲む。 ・集団遊びをする。 忍者ごっこが続いていたので、園庭で忍者の修行ごっこにチャレンジする ・絵本を見る 忍術学園シリーズの幼児が持ち寄った本や絵本を見る。 ・歌を歌う、降園する

ム、絵画制作」の六つの「領域」となった。この幼稚園教育要領をどのようにして子どもたちの生活に取り入れていくか、研究の課題として取り組み、1960年に基準法と指導計画を刊行するに至っている。子どもの興味を高める方法が具体的に示され、その後の保育活動の指標となった。

1989年、幼稚園教育要領の全面的な改訂が行われ、幼稚園修了までに育つ事が期待される「心情、意欲、態度」を教育目標とし、「幼稚園教育は環境を通して行うものである」という教育基本が示されたのである。幼児の発達は、各々の側面がばらばらに育つのではなく、様々な側面が相互に絡み合って影響を与えながら遂げられていくものであるとし、「健康、人間関係、環境、言葉、表現」の５領域を定め、総合的に指導することを求めている。本園でも「幼児期にふさわしい生活の展開」「遊びを通して行う総合的な指導」「一人一人の発達の特性に応じた指導」の三つの事項を重視し、教育課程の編成と指導計画の作成を行い、教育活動が展開されている。

幼児たちの生活（平和町での春夏秋冬）

毎年４月、新入園児が約60名入園する。桜の花の咲き乱れる中を、期待と不安に包まれた表情で、保護者に手を引かれての登園。玄関先で「先生、おはようございます」と一声、勢いよく駆け込む幼児。保護者と離れられずに泣いてしまう幼児。親と一緒に保育室で過ごす幼児など、様々な光景が繰り広げられる。一人一人の育ちや、これまでの経験を大切にした保育活動の展開である。そんな新入児らも、在園児の伸びやかな生活振りを見たり、いつでも自由にしたい遊びをしたりできる環境に気付いて、園生活に慣れ親しむようになってくる。青葉が茂るころには、大好きな先生や関心のある友達ができるようになり、一人一人がしたい遊びを見つけ、自分なりに生活リズムをつくっていく。

「先生、○○ちゃんが裸ん坊になっている」、「水鉄砲で、私に攻撃仕掛けてきた」と、思いきり水遊びができる夏の訪れである。小学校と共有で使っている、

写真１４－３８　のびのびフェスティバル

写真１４－３９　クリスマスおたのしみ会

写真１４－４０　新園舎の春

表１４－１８　年間行事

4月	1学期始業　入園式	9月	2学期始業	1月	3学期始業
	創立記念日　身体計測		避難訓練		養護実習
	育友会総会　遠足		身体計測		学年懇談会
	耳鼻科検診		のびのびフェスティバル		避難訓練
5月	学年懇談会　避難訓練				身体計測
	眼科検診	10月	バス遠足		修了記念撮影
	育友会役員会		募集要項公示		新入園児入園説明会
6月	教育研究発表会	11月	育友会研修講座		育友会役員会
	教育実習　検便・検尿		願書受付・締め切り	2月	豆まき
	内科検診　歯科検診		避難訓練		小学校との交流会
	育友会研修講座		学年懇談会	3月	避難訓練
7月	学年懇談会		入園選考		修了式
	たなばた会　避難訓練	12月	もちつき大会		3学期終業
	個人懇談会		クリスマスおたのしみ会		
	年長児夕涼み会		個人懇談会		
	1学期終業		2学期終業		
8月	プール遊び				

ちびっこプールでは、歓声が上がっている。思い思いの時間にプール遊びをしたがるので、付き合う教師も大変である。暑い中を虫探しに出かけたり、シャボン玉作りや色水作りをしたりして、汗を流して生活する姿に子どもたちのパワーを感じてしまう。５歳児にとっては、わくわくどきどきの風物詩ともいえる夕涼み会は、殊の外楽しみのようである。教

師や友達と一緒にお風呂に入ったり、夕食を食べたり、お化け屋敷で大声を張り上げて泣いてしまったり、心に残る貴重な体験といえる。

秋にはいろいろな行事が行われる。のびのびフェスティバルに始まり、虫取りのバス遠足、もちつき、小学校との交流活動、クリスマスおたのしみ会など、１年で一番充実した保育活動が展開される時期である。「ぼく、こんなことできるようになったよ」「みてみて、すごいでしょう」などと、一人一人が自分なりの成長を感じる時期でもある。一つ一つの行事に取り組むプロセスはその幼児なりのもので、千差万別であるが、集団の中で個としての生き方を学ぶ時期でもある。

平和町キャンパスに移転してからは、運動場で雪だるまをたくさん作ることができるようになった。園庭の築山から、思い切りそりで滑ることもできるようになり、雪の日は園庭がにぎわう。庇付きのテラスではかき氷屋さんやアイスクリーム屋さんが始まる。寒い冬も子どもたちにとっては素敵な環境である。

［付録１４－１］　歴代校園長・副校園長一覧

【校園長】

○小学校

在任期間	氏名
1951年 4月～1954年 3月（昭和26）（昭和29）	澤田　幸平
54年 4月～ 58年 3月	薄田　司
58年 4月～ 62年 3月	小西　英一
62年 4月～ 67年 4月	永守　良治
67年 5月～ 69年 5月	小松　周吉
69年 6月～ 71年 3月	増永　良丸
71年 4月～ 75年 3月	桐元　武一
75年 4月～ 79年 3月	菅村　曦
79年 4月～ 83年 3月	山﨑　豊
83年 4月～ 85年 3月	内田　糺
85年 4月～ 87年 3月	平光　昭久
87年 4月～ 89年 3月	眞行寺　功
89年 4月～ 92年 1月	矢部　俊政
92年 3月～ 93年 3月	眞行寺　功
93年 4月～ 97年 3月	吉田　貞介
97年 4月～	大塚　巌

○中学校

在任期間	氏名
1951年 4月～1954年 3月（昭和26）（昭和29）	永守　良治
54年 4月～ 58年 3月	密田　良二
58年 4月～ 61年 3月	古谷健太郎
61年 4月～ 65年 3月	密田　良二
65年 4月～ 69年 3月	山本彌一郎
69年 4月～ 73年 3月	熊木　義房
73年 4月～ 76年 3月	山本彌一郎
76年 4月～ 80年 3月	中島　孝
80年 4月～ 82年 3月	太田　雅夫
82年 4月～ 84年 3月	外野　隆二
84年 4月～ 88年 3月	森田　茂男
88年 4月～ 90年 3月	尼ヶ崎徳一
90年 4月～ 92年 3月	清水　康也
92年 4月～ 96年 3月	森　源三郎
96年 4月～ 98年 3月	宮城　陽
98年 4月～	森　源三郎

○高等学校

在任期間	氏名
［高等師範附属中学校主事］	
1947年 5月～ 51年 5月（昭和22）（昭和26）	小池　善雄
［高等学校主事事務取扱］	
51年 6月～ 52年 3月	川西　弘晃
［高等学校長］	
52年 4月～ 58年 3月	神力甚一郎
58年 4月～ 62年 3月	村上　賢三
62年 4月～ 66年 3月	翠川　潤三
66年 4月～ 69年 3月	三由　信二
69年 4月～ 71年 3月	新谷賢太郎
71年 4月～ 75年 3月	佐藤外喜雄
75年 4月～ 77年 3月	岡本信太郎
77年 4月～ 79年 3月	小松　周吉
79年 4月～ 80年 3月	矢ヶ崎孝雄
80年 4月～ 82年 3月	東　正雄
82年 4月～ 86年 3月	河合　茂治
86年 4月～ 87年 3月	加納　心治
87年 4月～ 89年 3月	外野　隆二
89年 4月～ 93年 3月	太田　雅夫
93年 4月～ 95年 3月	江森　一郎
95年 4月～ 96年 3月	清水　康也
96年 4月～ 98年 3月	村田　昭治
98年 4月～	上田　穣一

○養護学校

在任期間	氏名
1964年 4月～1968年 3月（昭和39）（昭和43）	澤田　幸平
68年 4月～ 70年 3月	薄田　司
70年 4月～ 72年 3月	大平　勝馬
72年 4月～ 74年 3月	岡本信太郎
74年 4月～ 78年 3月	東　正雄
78年 4月～ 80年 3月	西村登喜男
80年 4月～ 84年 3月	平澤　一
84年 4月～ 88年 3月	岡崎　康夫
88年 4月～ 92年 3月	大塚　明敏
92年 4月～ 96年 3月	山口　務
96年 4月～	宮口　尚義

○幼稚園

1951～1994年度までは小学校長が兼務

在任期間	氏名
95年 4月～ 98年 3月（平成7）（平成10）	矢澤　千宜
98年 4月～	諸岡　康哉

【副校園長】

○小学校

在任期間	氏名
1949年 5月～1951年 3月 （昭和24）　（昭和26）	川口源太郎
51年 4月～ 53年 3月	宇多周一郎
53年 4月～ 55年 1月	本田　貞一
55年 4月～ 69年 3月	冨沢　友治
69年 4月～ 81年 3月	八十田歳雄
81年 4月～ 85年 3月	池田　正義
85年 4月～ 88年 3月	正見　　巌
88年 4月～ 91年 3月	野村　祐治
91年 4月～ 94年 3月	窪田　長世
94年 4月～ 97年 3月	藤井　昭久
97年 4月～	澤野　　等

○中学校

在任期間	氏名
1949年 4月～1950年 3月 （昭和24）　（昭和25）	八田　有親
50年 4月～ 69年 3月	上多　正男
69年 4月～ 80年 3月	馬場　末吉
80年 4月～ 84年 3月	高野　敏三
84年 4月～ 88年 3月	蘭森　正栄
88年 4月～ 89年 3月	池田　克己
89年 4月～ 90年 3月	天川　義昭
90年 4月～ 93年 3月	森川　與春
93年 4月～ 94年 3月	前川　秀郎
94年 4月～	石野　武志

○高等学校

在任期間	氏名
1947年 4月～1948年 3月 （昭和22）　（昭和23）	水上勇太郎
48年 4月～ 49年 5月	佐々木宜男
49年 5月～ 71年 3月	川西　弘晃
71年 4月～ 74年 3月	綿谷　勝以
74年 4月～ 85年 3月	高瀬　　允
85年 4月～ 86年 3月	小倉　幸春
86年 4月～ 87年 3月	玉鉾　良三
87年 4月～ 90年 3月	能崎　克己
90年 4月～ 95年 3月	鉄車　佳司
95年 4月～ 97年 3月	松田　章一
97年 4月～ 98年 3月	上田外志夫
98年 4月～	滝野　　勲

○養護学校

在任期間	氏名
1964年 4月～1975年 3月 （昭和39）　（昭和50）	荒間　八郎
75年 4月～ 89年 3月	野市　源朔
89年 4月～ 92年 3月	伊藤　泰彦
92年 4月～ 96年 3月	加藤　定雄
96年 4月～	浦田　東作

○幼稚園

在任期間	氏名
1966年 4月～1986年 3月 （昭和41）　（昭和61）	小泉　しげ
86年 4月～	松本　陽子

［付録１４－２］　附属学校園沿革

［小学校・養護学校］

石川県集成学校附属小学校（1874）

石川県師範学校附属小学校（1874）

石川県男子師範学校附属小学校（1875）

石川県男子師範学校練習部（1879）

石川県第一小学師範学校練習部（1880）

石川県第一小学師範学校附属小学校（1880）

石川県金沢小学師範学校附属小学校（1880）

石川県金沢師範学校附属小学校（1881）

石川県師範学校附属小学校（1883）

石川県尋常師範学校附属小学校（1886）

石川県師範学校附属小学校（1898）

石川県師範学校附属尋常高等小学校（1911）

石川県女子師範学校
附属尋常高等小学校（1914）

石川県師範学校
附属国民学校（1941）

石川県女子師範学校
附属国民学校（1941）

石川師範学校男子部
附属国民学校（1943）

石川師範学校女子部
附属国民学校（1943）

石川師範学校男子部
附属小学校（1947）

石川師範学校女子部
附属小学校（1947）

石川師範学校附属小学校（1949）

金沢大学石川師範学校附属小学校（1949）

（併設）特殊学級

金沢大学教育学部
附属小学校（1951）

金沢大学教育学部
附属養護学校（1964）

［中学校］

石川師範学校男子部
附属中学校（1947）

石川師範学校女子部
附属中学校（1947）

石川青年師範学校
附属中学校（1947）

石川師範学校附属中学校（1949）

金沢大学石川師範学校附属中学校（1949）

金沢大学教育学部附属中学校（1951）

［高等学校］

金沢高等師範学校附属中学校（1947）

金沢高等師範学校
附属中学校・高等学校（1948）

金沢大学金沢高等師範学校
附属中学校・高等学校（1949）

金沢大学教育学部附属高等学校（1952）

［幼稚園］

金沢幼稚園（1885）

石川県師範学校附属幼稚園（1887）

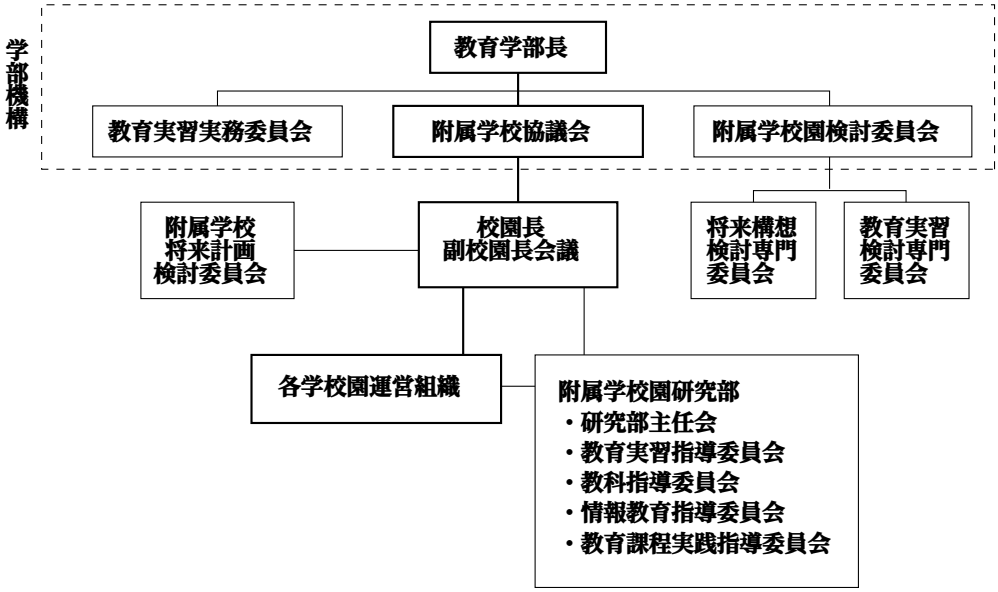
石川県女子師範学校附属幼稚園（1914）

石川師範学校女子部附属幼稚園（1943）

金沢大学石川師範学校附属幼稚園（1949）

金沢大学教育学部附属幼稚園（1951）

［付録１４－３］　附属学校園運営機構図



【参考文献】

『附属養護学校の20年史』（荒間八郎）
『附属高等学校創立三十周年記念史』
『附属幼稚園学校沿革史』
『幼稚園のしおり』
『付属小学校百年史』
『附属小学校学校沿革誌』
『教育実習生当番日誌』
『附中のあゆみ三十年』
『附高40年』
『金大附高新聞』
『附属中学校学校要覧』
『附属養護学校育友会広報誌「すずかけ」』